

# 京都橘大学 歴史遺産調査報告 2015

華嚴寺（鈴虫寺）本堂、東六甲採石場甲山刻印石群E地区、  
山科大塚・小山石切丁場

2016年3月  
京都橘大学 文学部



## はじめに

本学の歴史遺産学科は、その前身となる文化財学科が1996（平成8）年に設置申請、同年12月に認可、1997（平成9）年4月より開設された。その後、2012年4月1日より文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

文化財学科を開設した当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける学びの一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部のフィールドを中心として、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場での実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、本学裏山にある山科大塚・小山石切丁場などの諸調査を実施した。ここではそれらの成果を中心として報告する。報告書を作ることもまた、学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大作業であり、これらの活動全体を通し、文化遺産のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

さて、学科名を歴史遺産と銘打ったのは、近年世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みた結果である。「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの2つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高める」ものである。

私たちがここで歴史遺産に関わる作業と勉学に向き合えるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げます。今後とも文化財調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

2016年3月31日

京都橋大学文学部

## 例　　言

1. 本書は、京都橋大学が2015年度に実施した京都市山科大塚・小山石切丁場や京都市華嚴寺（鈴虫寺）、兵庫県西宮市東六甲甲山刻印群などの歴史遺産学科歴史遺産コースを主とした文化遺産の調査報告書である。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系にとってその位置を示した。
3. 本文の執筆には、第1章を嵯峨根絵美・一瀬和夫・登谷伸宏、第2章を登谷伸宏、第3章を岸 薫美・山本温可、第4章を広瀬侑紀・山本温可、第5章を嵯峨根絵美・垣内彩那があたった。
4. 本書の編集は、一瀬和夫が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、書寫山圓教寺、華嚴寺（鈴虫寺）、泉佐野市教育委員会、兵庫県教育委員会、芦屋市教育委員会、西宮市教育委員会、兵庫県立甲山森林公園、OFFICE萬瑠夢、（株）橋本工務店、九州大学大学院芸術工学研究院、京都市市民文化局文化財保護課、大塚共有山護持会、廣田浩治、東原直明、大樹玄承、桂紹寿、岸 泰子、奥田 尚、奥村弥恵、森岡秀人、西川卓志、合田茂伸、森下眞企、山田暁、西森正晃、黒須亜希子、平井信夫、岩村義憲、中川亀造、武内良一、久保 孝、青地一郎、藤本史子、福家 恭、高田裕一をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

# 目 次

はじめに・例言

目次

第1章	2015年度の文化遺産調査の概要と経過	1
第2章	2015年度の建築遺産調査	3
第3章	東六甲甲山刻印群（E地区）の実測調査	7
第4章	山科大塚・小山石切丁場のクレーター状平場の 測量調査	20
第5章	山科大塚・小山石切丁場の刻印石の踏査	27
	報告書抄録	

図・表目次

図1	華厳寺（鈴虫寺）本堂平面図	4
図2	明治四十五年華厳寺（鈴虫寺）本堂建立棟札	5
図3	大正元年華厳寺（鈴虫寺）本堂喜捨札	6
図4	徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群地区分布	7
図5	徳川大坂城東六甲採石場 矢穴痕形態分類図	8
図6	徳川大坂城東六甲採石場の刻印群・関連遺跡 の検出主要刻印分布一覧と想定搬出ルート	8
図7	甲山刻印群E地区北群の関連石材密集地区	9
図8	甲山刻印石群E地区北群No.3・4・15~17 位置図	10
図9	甲山刻印石群E地区北群No.3・4・16平面・ 断面図	11
図10	甲山刻印石群E地区北群No.3石材	12
図11	甲山刻印石群E地区北群No.4石材	13
図12	甲山刻印石群E地区北群No.16・17石材	14
図13	甲山刻印石群E地区北群No.3・4矢穴法量 グラフ	16
図14	甲山刻印石群E地区北群No.4・15~17矢穴 法量グラフ	17
図15	山科大塚・小山石切丁場位置図	20
図16	山科大塚・小山石切丁場と伏見城位置関係図	21
図17	山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場 測量図	22
図18	山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場 矢穴石	23
図19	山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場 矢穴石切模式	24
図20	山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場 矢穴石矢穴法量グラフ	25
図21	山科大塚・小山石切丁場大塚地区刻印石分 布図	28
表1	甲山刻印石群E地区北群No.3・4・15~17 矢穴法量一覧	15
表2	山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場 矢穴石矢穴法量一覧	24
表3	山科大塚・小山石切丁場刻印一覧表	29

## 第1章

# 2015年度の文化遺産調査の概要と経過

### 1. 2015年度の調査状況

今年度の考古遺産の現地調査作業については、夏期を中心に、兵庫県西宮市東六甲・甲山刻印石群（E地区）・京都市山科区大塚・小山石切丁場の調査を実施した。

建築遺産の調査については、大阪府泉佐野市、京都市華厳寺（鈴虫寺）、兵庫県姫路市書寫山圓教寺などで実施した。

本書の全体の整理作業にあたっては、歴史遺産学実習の授業を中心に、嵯峨根絵美、岸 薫美、猪爪沙有理、井村 曜、岩崎菜津美、鶴子 悟、垣内彩那、黒柳絢香、後藤けい、空 真梨乃、徳泉翔平、中川美沙紀、松尾奏子、山本温可、浅野 豊が行った。

今年度に主として歴史遺産コースが実施した調査の概要は、以下に紹介する通りである。

### 2. 泉佐野市佐野・第三中学校区の寺社建築調査

泉佐野市は、大阪府の南部に位置する。市域は、近世までの町場であった佐野村と、北中通村・日根野村・長滝村・上之郷村・南中通村・大土村の旧六ヶ村により構成される。

泉佐野市では、2014（平成26）年度から歴史文化基本構想策定に関わる文化財総合把握調査に着手しており、15年度はその一環として、市域のうち佐野・第三中学校区内に所在する寺社建築の調査を実施した。調査は、泉佐野市建造物調査会（代表：登谷伸宏）が行い、本学科の学部生が調査補助・図面作成などを担当した。

調査方法、および内容は以下の通りである。まず、佐野・第三中学校区に所在する寺社建築の悉皆調査を行った（写真1）。つぎに、そのなかから顕著な特徴を持つ建物を選び、詳細調査を実施した。詳細調査の内容は、対象建物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2015年6月26日、7月10日・17日、8月4～5日・11日、9月1～2日・8日・10日、10月9日、11月20日、12月24～25日、2016年

2月4日に行った。

調査参加者は、村田信夫・橋本市郎・岸泰子・磯谷充子・大城友莉奈・大地未来・大場彩加・小川季子・小林沙也・竹森綾香・細川真奈美・松本真理である。

### 3. 華厳寺（鈴虫寺）本堂の調査

華厳寺（鈴虫寺）は、京都市西京区松室に所在する。1723（享保8）年、鳳潭上人により華嚴宗の寺院として開かれた。1868（慶応4）年、慶巖が入寺し臨済宗へ改めたという。

華厳寺（鈴虫寺）の境内は、延朗山の東麓から少し登った平坦地に位置する。境内の南側に山門を開き、その北西に本堂、北奥に客殿が所在する。

本堂の建物については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていなかった。そこで、今年度は、本堂の実測調査、および史料調査を、華厳寺（鈴虫寺）の協力のもと実施した。具体的には、平面・断面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書の調査、建立年代の確認、建築的特色的記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2015年7月31日、10月16日・23日、2016年2月23日に行った。

調査参加者は、大場彩加・大地未来・大城友莉奈・神田純花である。

### 4. 書寫山圓教寺十妙院の調査

圓教寺は、姫路市中心部の北方の書写山上に所在する。平安時代中期に性空上人により開かれた天台宗の寺院である。

圓教寺の伽藍は、仁王門・摩尼殿などからなる東谷、大講堂・食堂・常行堂のいわゆる三之堂と奥の院からなる西谷により形成される。山上には中世・近世の建造物が多く現存し、2016年3月の時点で12件21棟が、国指定・県指定・国登録の文化財となっている。

今年度は、圓教寺の伽藍のなかで、東谷に所在する十妙院客殿及び庫裏について調査を行った。十妙院は、東谷のうち摩尼殿のやや南方に位置する。

圓教寺の主要な堂舎は、多くがすでに重要文化財や兵庫県指定文化財となっており、十妙院客殿及び庫裏も、2014年に重要文化財に指定された。今年度は、歴史遺産学実習の一環として客殿及び庫裏の実測調査、および史料調査を、圓教寺の協力のもと実施した。具体的には、対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調

査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2015年8月31日を行った。

調査参加者は、大地未来・小笠山雄也・小林沙也・金剛佳祐・榎原有紀・竹森綾香・中本健太・中山翔太・平林勇人・細川真奈美・山際大貴・吉田脩平である。

## 5. 東六甲甲山刻印群E地区の実測調査

東六甲採石場は、兵庫県西宮市・芦屋市の丘陵部分が



写真1 泉佐野市悉皆調査の風景



写真2 山科大塚・小山石切丁場踏査風景



写真3 山科大塚・小山石切丁場 クレーター状平場測量風景

中心で神戸市東部（東灘区住吉川東岸付近）にまで及び位置する。

ここは近世初頭の徳川氏によって再建された大坂城の築城にかかる石垣用の石材を採取した場所と目されており、東六甲採石場の調査研究は近世城郭研究に大きな役割を果たしている。

今回本学が調査したのは、甲山刻印群E地区である。E地区は甲山を中心とする山塊部の東辺、その東側に広がる武庫川（仁川）の形成した平野部に並行して南北方向に伸びる尾根の稜線部を主体として位置する。

そのうち、E地区尾根頂部近くのうち、No.3・4の刻印石とNo.15～17の矢穴が残る石の実測を行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、2015年8月17・18・19・20日、11月14日を行った。

調査参加者は、嵯峨根絵美、猪爪沙有里、井村曜、大柳美翔子、黒柳絢香、小山暖加、竹村友玖、中山翔太、山本温可、大城友莉奈、小林沙織、中村駿介、前野敏久である。

## 6. 京都市山科区大塚・小山石切丁場の刻印石踏査とクレーター状平場測量調査

京都市山科区大塚・小山の山中に所在する石切丁場では、本学の裏山となる行者ヶ森の山の頂上付近から東及び北斜面の大塚と音羽・山科川を離てた小山の山中に刻印と矢穴のある石が分布する。近年その状況については、地元の方々によって丹念に調査されているところである。

その石切丁場のうち今年度は刻印のある石材の踏査と大塚東群の丘陵斜面にあるクレーター状にくぼんだ平場の地形測量と石材実測を行った。その名称は、この2015年に遺跡台帳に大塚・小山石切丁場として記載されることになったことを受けて同様に呼称する。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、広瀬侑紀がこれを助けた。日程は、2015年6月21日、7月12日、8月3・4・5・6・7・8・9日、12月19・26日を行った。

調査参加者は、嵯峨根絵美、猪爪沙有里、井村曜、岩崎菜津美、大柳美翔子、垣内彩那、黒柳絢香、小山暖加、空真梨乃、竹村友玖、中山翔太、松尾奏子、山本温可、石塚真和、大城友莉奈、小林沙織、中村駿介、前野敏久、長谷川翔一である。

# 第2章

## 2015年度の建築遺産調査

### 1. 調査経緯

今年度の建築遺産調査は、夏期から秋期にかけて、大阪府泉佐野市佐野・第三中学校区、京都市西京区華厳寺（鈴虫寺）、兵庫県姫路市圓教寺で行った。佐野・第三中学校区、圓教寺の調査については、別途報告書を刊行する予定となっており、以下では、華厳寺（鈴虫寺）本堂の調査について詳細に報告する。

### 2. 華厳寺（鈴虫寺）本堂の調査

#### （1）華厳寺（鈴虫寺）について

華厳寺（鈴虫寺）は、京都市西京区松室に所在する。1723（享保8）年に、華厳宗の復興を目指した鳳潭上人により開かれた寺院である。境内は、延朗山の東麓から少し登った平坦地に位置し、南側に山門を開く。山門から参道が北に延び、その奥に客殿がある。本堂は、山門の北西にあり、参道に面して立つ。

1709（宝永6）年、鳳潭は華厳寺を開くため、上山田村の安照寺の敷地を買得した。だが、この敷地は、松尾社の社地であったため、翌々年には、現在の寺地へ移転し、大規模な伽藍の造営に着手した<sup>(1)</sup>。

このとき鳳潭の計画した伽藍は、本堂を中心として方丈・庫裏・客寮・門などからなる非常に規模の大きなものであった。しかしながら、実際に建ったのは、庫裏と方丈を兼ねた建物、および門・諸雑舎のみであり、庫裏・方丈兼用の建物が本堂の役割を果たしたと考えられる。その後も造営は進まなかったようで、1843（天保14）年の指図によると、南東に門を開き、境内中央に方丈と庫裏を兼ねた建物が立っていたことがわかる。

1868（慶応4）年に入寺した慶巖により、当寺は華厳宗から臨済宗へと転じた。慶巖は当寺の再興に尽力し、中興開山とされる僧侶である。本堂内に掲げられた「本堂建築喜捨芳名」（図3）によると、慶巖は、少なくとも1886（明治19）年以前には本堂の造営を計画していたようで、この年に母親から200円の喜捨を受けている。さらに、1911年から12（大正元）年にかけて、多くの人々からの喜捨を募るとともに、本堂造営に着手したと考えられる。

#### （2）華厳寺（鈴虫寺）本堂の建築的特徴について

今年度は、華厳寺（鈴虫寺）本堂の建築的特徴を明らかにするため、平面図の実測、棟札・関連史料の調査を実施した。その結果を以下に示す。

#### 華厳寺（鈴虫寺）本堂

桁行8.1m、梁間8.1m、入母屋造、背面軒下張出、桟瓦葺

1912年（明治45 棟札）

角柱 切目長押 内法長押 舟肘木 中備なし 一軒疎  
垂木 妻飾漆喰塗

小規模な建物で、北東を正面として立つ。装飾はほとんどなく、おとなしいつくりである。

平面は、手前に三室、奥に仏間二間と部屋を並べる。正面には室内に取り込むかたちで広縁を設け、東側面を除く三方には、濡縁を廻す。方丈形式を簡略化した平面形式とみなすことができよう。手前の三室は、正面に向かって右手から下闕の間・室中・上闕の間と呼ぶ。各室境、仏間および広縁境の敷鴨居にはいずれも二本溝があ



写真4 華厳寺（鈴虫寺）本堂正面全景



写真5 華厳寺（鈴虫寺）本堂正側面全景

り、建具を入れるようにつくられている。室中と上闌・下闌の間境には竹の節欄間を入れ、仏間境には簾欄間を入れる。上闌の間は側面に連子窓を開ける。一方の下闌の間は側面に掃き出しの開口部を設けるが、敷居に連子子の痕跡があり、当初は、この敷居が窓台であり、上闌の間同様、連子窓に復元できる。

中央の仏間は奥に仏壇を備え、最奥部の床高を一段高く上げて三室に分ける。中央のみ花頭窓とし、本尊を安置する。また、正面に向かって右側の仏間には、鳳潭上

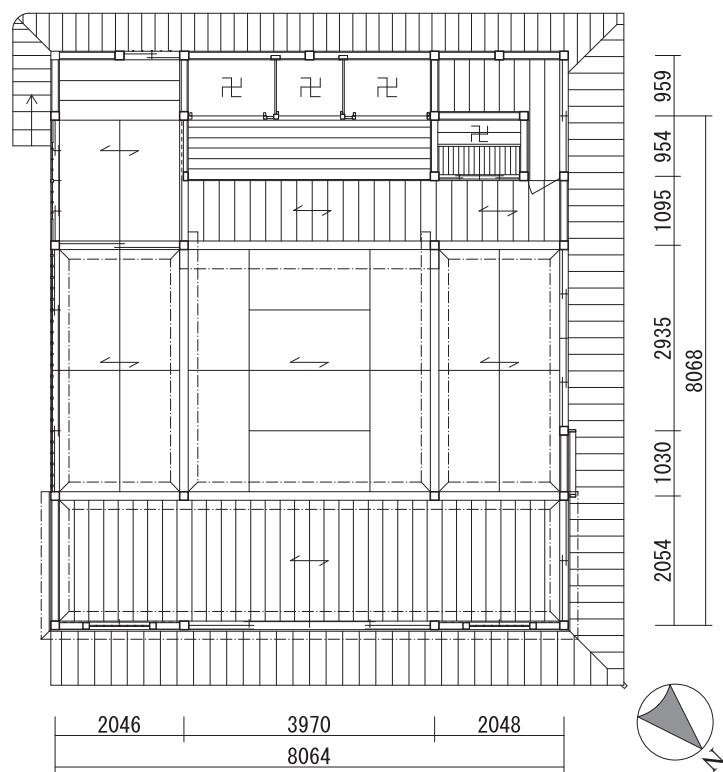


図1 華嚴寺（鈴虫寺）本堂平面図



写真6 華嚴寺（鈴虫寺）本堂広縁

人像を祀る仏壇を設ける。向かって左側は部屋とする。現在は物置として使用されているが、側面には竹小舞をみせた丸窓を設けており、もとは別の用途に用いられたと考えられる。

小屋組は和小屋である。小屋束・貫とともに少なく、当初は瓦葺きでなかったのかもしれない。

建立年代は、棟札から1912年であることが判明する。願主は当寺の中興とされる慶巖である。当堂は移築建物であると伝えるが、建物に解体した痕跡は見当たらない。

曳家の可能性もあるが、ここでは、部材の風蝕などから新たに造営したとみておきたい。大工は西野五兵衛、手伝いが山野勝太郎である。五兵衛は、本堂再建のために喜捨した人名を書き上げた扁額から、嵯峨に居住していたことがわかる。

小規模ながら、簡略化した方丈形式の平町を持つ興味深い建物である。また、近代以降の華嚴寺（鈴虫寺）再興の歴史を表す重要な遺構であるといえよう。

注

- (1) 『華厳寺文書』(華厳寺〈鈴虫寺〉所蔵)。以下、伽藍造営の事実関係については、同文書による。



写真7 華嚴寺（鈴虫寺）本堂室中



写真8 華厳寺（鈴虫寺）本堂室中見返し



写真9 華厳寺（鈴虫寺）本堂下闇の間から仏間を見通す



写真10 華厳寺（鈴虫寺）本堂小屋組



写真11 華厳寺（鈴虫寺）本堂敷居に残る連子の痕跡



写真12 華厳寺（鈴虫寺）本堂仏間

#### 棟札翻刻

棟札名の下に記した註記は、棟札の所在位置、棟札の寸法、材種、木取り（柾目か、板目か）、仕上げ工具である。棟札の寸法は、中央部長さ・端部の長さ・上幅・下幅・厚みの順にミリメートル単位で記した。棟札の形状が長方形の場合は、中央長さを略した。

① 明治四十五年華厳寺（鈴虫寺）本堂建立棟札	（表）	上棟式 王子 明治四十五 七月 念一日	大工 西野五兵衛 現住職 慶嚴	仏間裏	728 711 143 128 10
	（裏）	（取りはずさず）	手伝 山名勝太郎		



図2 明治四十五年華厳寺（鈴虫寺）本堂建立棟札



## 第3章

# 東六甲甲山刻印群（E地区）の実測調査

## 1. 概 要

徳川大坂城の総数400万石と推定される石垣を構築する石材は、加茂・御影・小豆島・西国・北国・九州の採石場より切り出されたことが古文書の記載より判明しており、実際に香川県・岡山県・瀬戸内海地域の島嶼部・兵庫県表六甲・大阪府生駒山西麓などで矢穴石や刻印石とみられる石材が多く見つかっている。

中でも兵庫県神戸市の六甲山系で採石された六甲花崗岩（御影石）が徳川大坂城の石垣用石材で最も多く使用されていることから、他の採石場より多くの石材が採石されていたことが考えられる。この六甲山系の石切場は、西宮市・芦屋市・神戸市東灘区の山中、山麓部に分布しており「徳川東六甲採石場」と呼ばれている。

ここに徳川大阪城の石切場が東六甲に集中している理由としては、①大坂城に近く、大阪湾を通じた水運が可能であったという地理的要因。そして、②この地域が尼崎5万石の藩主で大坂城普譜奉行<sup>(1)</sup>でもあった戸田氏鉄の所領内であったという政治的要因が挙げられる。①に関して石垣の構築では、隅角部を構成する「角石」、「角脇石」以外に「築石」という石材が使用される。築石とは石垣用石材の中で最も数多く必要とする石材であり、比較的近場だった東六甲だからこそ他の採石場に比べて築石が無数に採石でき大阪湾を通じて運搬できたと考えられる。②に関して戸田氏鉄とは安土桃山～江戸時代前期の武将で大垣藩初代藩主となった人物である。氏鉄は、徳川家康の家臣で江戸幕府において普譜奉行の職に就くと、1624（寛永10）年に大坂城修築に奉仕した。また、この氏鉄の所領地は摂津国川辺・武庫・兎原・八部・有馬（現：尼崎市・宝塚市・西宮市・芦屋市・神戸市など）で、その中でも川辺・武庫・兎原・八部群域に含まれる東六甲地域は花崗岩の産地として著名だった（中村2006）。

## 2. 環 境

徳川大坂城東六甲採石場は、主として神戸市東灘区・芦屋市・西宮市域の東六甲山地南東斜面に分布

する。六甲山地については、北東～南東方向にはほぼ30kmの山体で山地の伸びと平行する急崖とその間にあらこれら地域は断層と平垣面で構成される。徳川大坂城東六甲採石場の六甲山地の大部分は花崗岩類からなり、古くから「六甲花崗岩」と呼ばれ、石材として利用してきた。

徳川東六甲採石場については、分布や刻印石といった地形的まとまりから「甲山刻印群（西宮市、A～G地区）」「北山刻印群（西宮市）」「越木岩刻印群（西宮市）」「岩ヶ平刻印群（芦屋市・西宮市）」「奥山刻印群（芦屋市、A～M地区）」「城山刻印群（芦屋市、A～G地区）」の6つのグループに分かれる（図4）。

## 3. 徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群 E地区について

本節では本学が調査した甲山刻印群E地点の概要を紹介する。

### （1）E地区の位置

今回調査した甲山刻印群は7地区に分かれる（図4）。甲山を中心とする山塊部の東辺あたり、その東側に広がる武庫川（仁川）の形成した平野部に並行して南北方向に伸びる尾根の稜線部を主体として広がる。該当範囲はT.P.165～178m、延長約400m、幅約150mの尾根を中心とした地区であり、県立甲山森林植物園の展望広場西

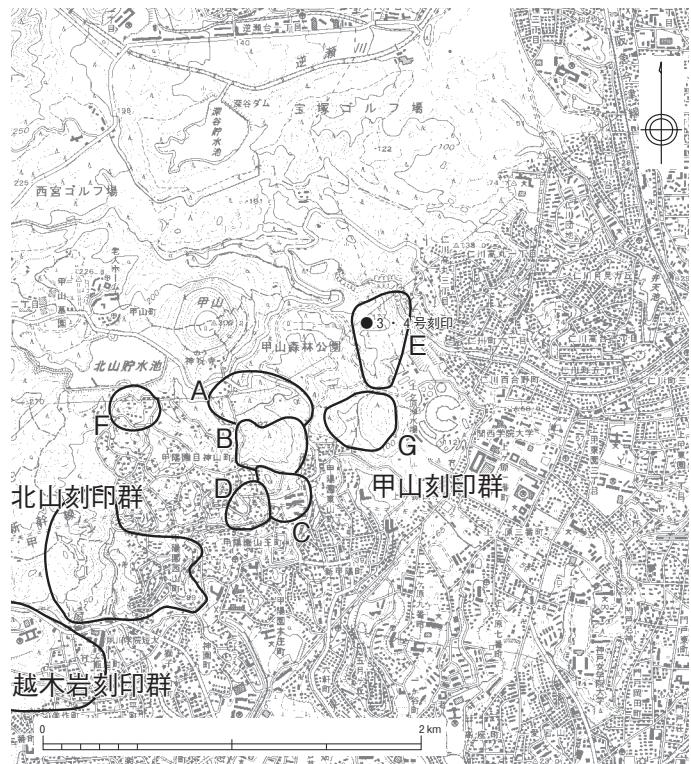


図4 徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群地区分布

形態	先Aタイプ	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
平面形				
断面形	 	 	 	 
(短辺)				
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>矢穴列には歪みがある。</li> <li>平面には長楕円形 (割られた矢穴痕跡から推定)</li> <li>断面は浅いU字形、または船底形</li> <li>長さは10cm前後をはかるが、矢穴痕ごとのばらつきも大きい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>徳川大坂城東六甲採石場に伴う矢穴痕</li> <li>割付線を用いて、直列に矢穴を並べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平面は長方形</li> <li>断面は逆台形または“コ”字形</li> <li>長さに対して深さが大きい</li> <li>長さ：10cm前後</li> <li>深さ：10cm前後</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平面は正方形に近い</li> <li>断面は逆台形または“コ”字形</li> <li>長さと深さは近似値</li> <li>長さ：3 cm前後</li> <li>深さ：3 cm前後</li> </ul>

図5 德川大坂城東六甲採石場 矢穴痕形態分類図（兵庫県教育委員会事務局文化財室2008より）

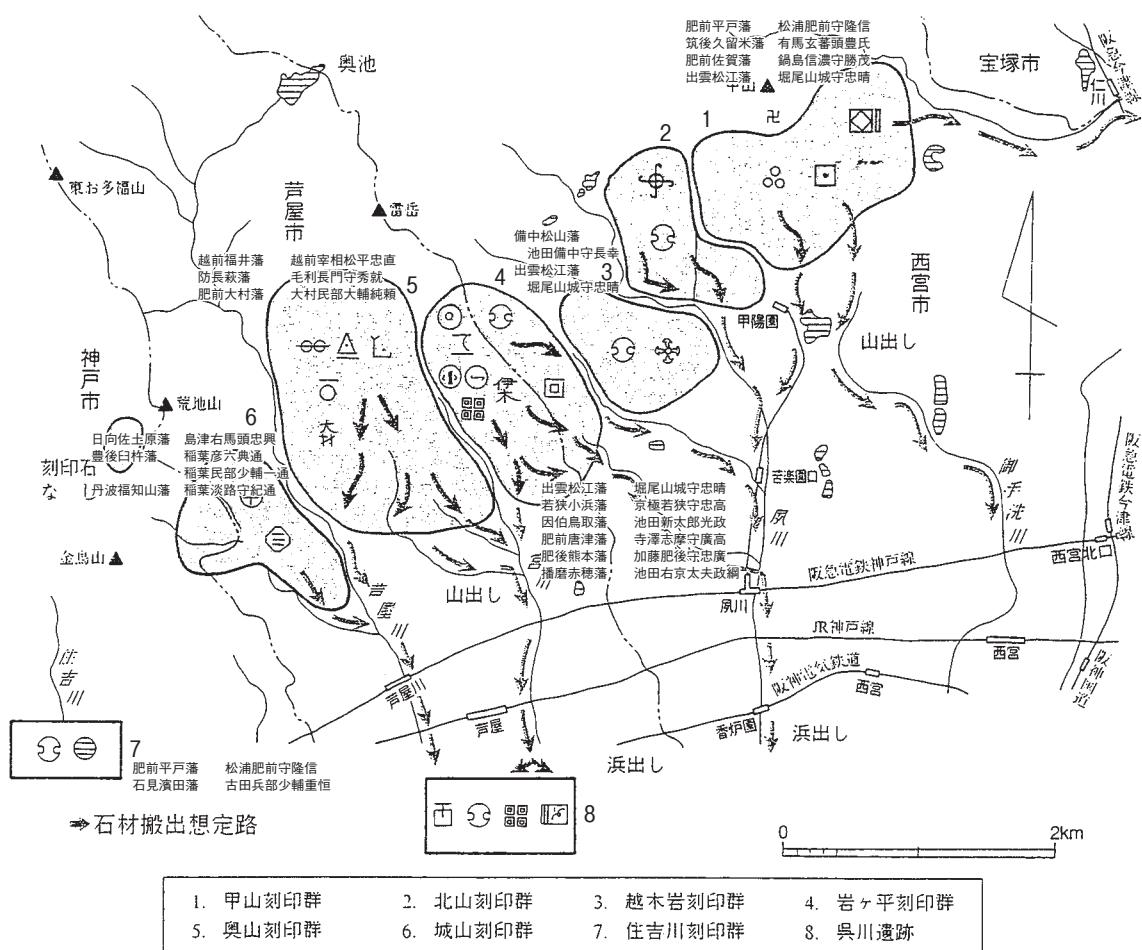


図 6 徳川大坂城東六甲採石場の刻印群・関連遺跡の検出主要刻印分布一覧と想定搬出ルート（森岡秀人氏図に加筆）  
（中村博司2006より）

側にあるT.P.178mの頂部を最高所として、5ヶ所の尾根頂部がほぼ南北に並ぶ地形にある。

なかでもE地区は、六甲山系の南東隅部に相当することから平野部に至るためには東と南の方向に進むことになり、東側ルートについては最終的に一級河川の武庫川(仁川)、西側ルートについては夙川に至る(図6)。なお、川幅・水量等の規模としては両者とも同等の河川であり、石材の搬出に際して水運を利用した場合、いつもその役割を担った可能性が考えられる。

## (2) E地区の内容

このE地区は、甲山刻印群の中でも最も北東に位置しており、石材群の散布状態をみると、北群(展望広場の所在する尾根部を中心とする地区)(図7)と、南群(南尾根頂部を中心とする地区)とに分かれる。さらに北群に関しては、展望広場西側の山塊を中心とする群とその西側頂部の西斜面にみられる群に細分される。

## (3) E地区の刻印と矢穴

今回調査した刻印と矢穴が残る石材はNo.3・4・15~17である(図7で黒く囲った部分)。以下は、それぞれの刻印石材の説明である(写真13・14)。

E地区においては12個の刻印が確認されている。その中で2個の「□」を除いて、どれも「□」と「◇」が重なった横に「□」がセットとなる「□□」の形態であり北群の展望広場西側山塊部に集中している。

No.3は北群に位置し、「□□」の刻印が割面に見られる調整石<sup>(2)</sup>で長さ209cmである(写真21)。東側面(Y3-2)、北側面(Y3-1)には矢穴が確認できる。なお西と南側面は矢穴がない自然面<sup>(3)</sup>である(写真15)。

No.4は北群に位置し、No.3の東隣にあり「□□」の刻印が割面に見られる長さ126cmの調

整石である(写真22)。東西南北いずれの側面にも矢穴が確認できる(写真16・17)。また、No.4と対になる割石が西隣にあり、その上西側面(Y4-1)に矢穴が確認できる。

No.15は北群に位置し、No.3・4・16・17より南の離れた場所にあり(図8)、刻印は見られない割石<sup>(4)</sup>で、長さ・幅・厚さとともに不明である。矢穴は南面側(Y15-1)の25cmの間に2箇所ある。

No.16は北群に位置し、No.3・4のすぐ北上にあり、刻印は見られない割石で長さ34cmである。東側面(Y16-2)と南側面(Y16-1)に矢穴が確認できる(写真18)。なお西と北側面は矢穴のない自然面である。

No.17は北群に位置し、No.3の西上にあり刻印は見られない割石で長さは160cmある。西側面(Y17-1)、南側面に矢穴が確認できる(Y17-2)。なお東と北側面は

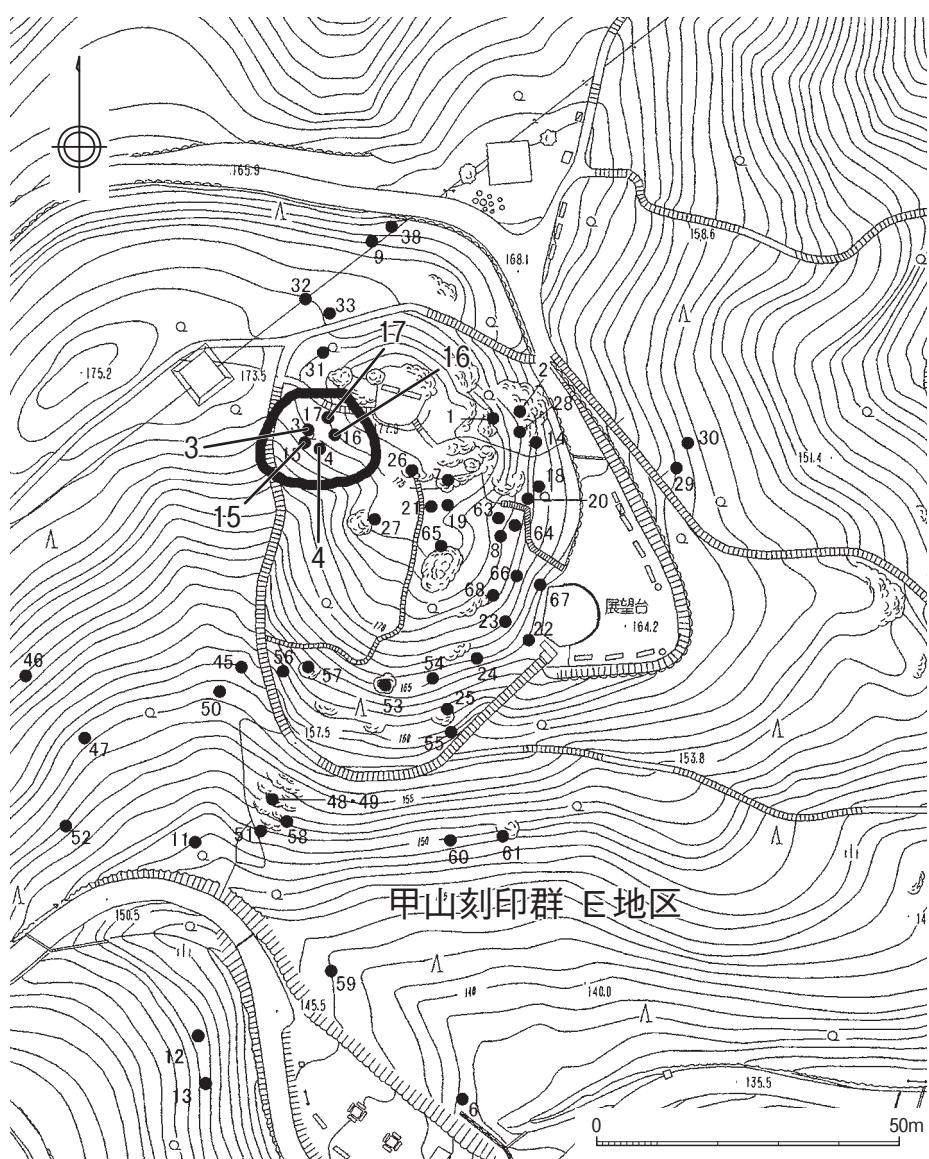


図7 甲山刻印群E地区北群の関連石材密集地区

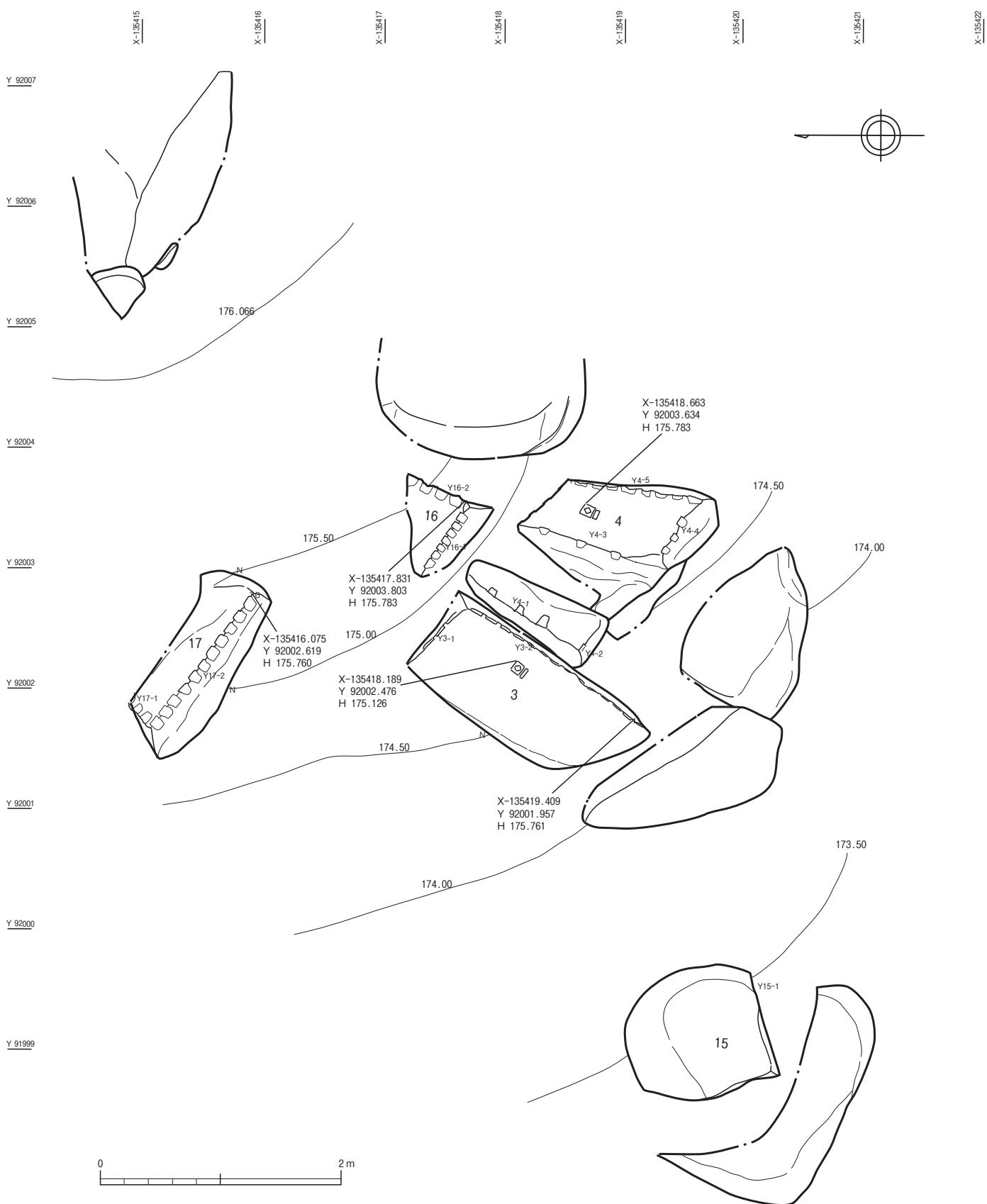


図8 甲山刻印石群E地区北群No.3・4・15~17位置図

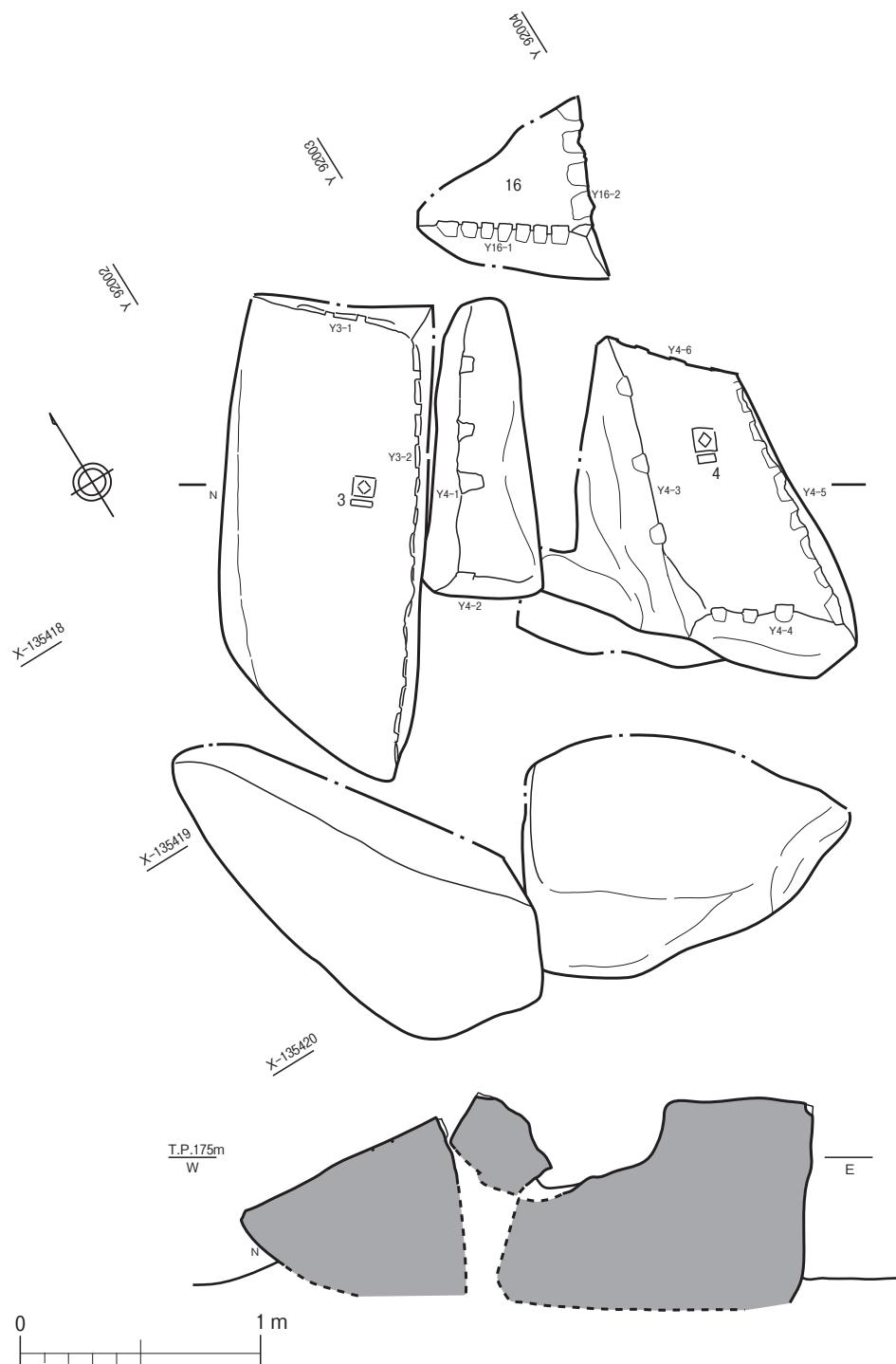


図9 甲山刻印石群E地区北群No.3・4・16平面・断面図

矢穴のない自然面である（写真19・20）。

#### 4. 調査の成果

今回調査した刻印石材3・4・15～17（図7で黒線で囲った部分）は、北群の部分に属する。以下は、それぞれの刻印石材の説明である。

No. 3は、Y3-2列よりのところ南側から145cm北の上

面に刻印がある。方形部 $10.20 \times 10.0\text{cm}$ の「□□」の刻印が割面に見られる（図10）<sup>(4)</sup>。標高はT.P.174.7～175mに位置する。長さ209cm、幅59cm、厚さ82cmである。東側面（Y3-2）は209cmの間に14個の矢穴が確認でき、口幅5.5～11cm、底幅4.5～11cm、深度4～10cm、口間幅3～5cm、底間幅5～9cmである。北側面（Y3-1）は88cmの間に4個の矢穴が確認でき、口幅9～10cm、底幅

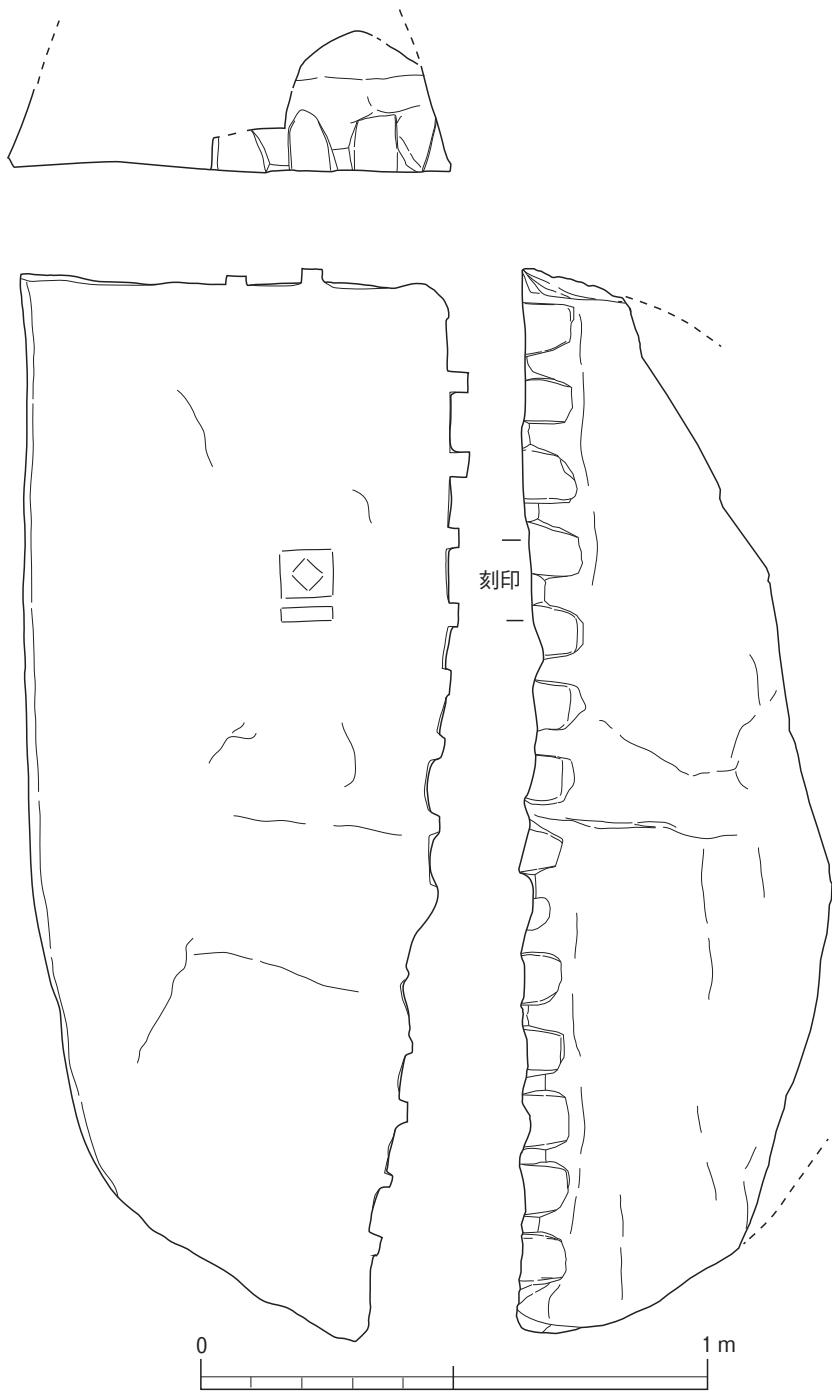


図10 甲山刻印石群E地区北群No.3石材

6～9cm、深度8～11cm、口間幅3cm、底間幅6～7cmである。矢穴型式はAタイプである。なお西と南側面は矢穴がない自然面である。

No.4はNo.3の東隣にあり、中央やや北よりの上面のところに $11.4 \times 10.5$ cmの「□□」の刻印が割面に見られる調整石である（図11）。T.P.175.2mに位置する。長さ121cm、幅72cm、厚さ87cmである。東側面（Y4-5）

は121cmの間に9個あり、矢穴は口幅8.5～13cm、底幅7～13cm、深度5～9.5cm、口間幅3.5～5.5cm、底間幅4～8cmである。西側面（Y4-3）は99cmの間に3個の矢穴が確認でき、口幅4～6.5cm、底幅4～5cm、深度5～7cm、口間幅18～24cm、底間幅20～25cmである。南側面（Y4-4）は63cmの間に3個の矢穴が確認でき、口幅5～7cm、底幅5～7cm、深度6～12cm、口間幅6～7

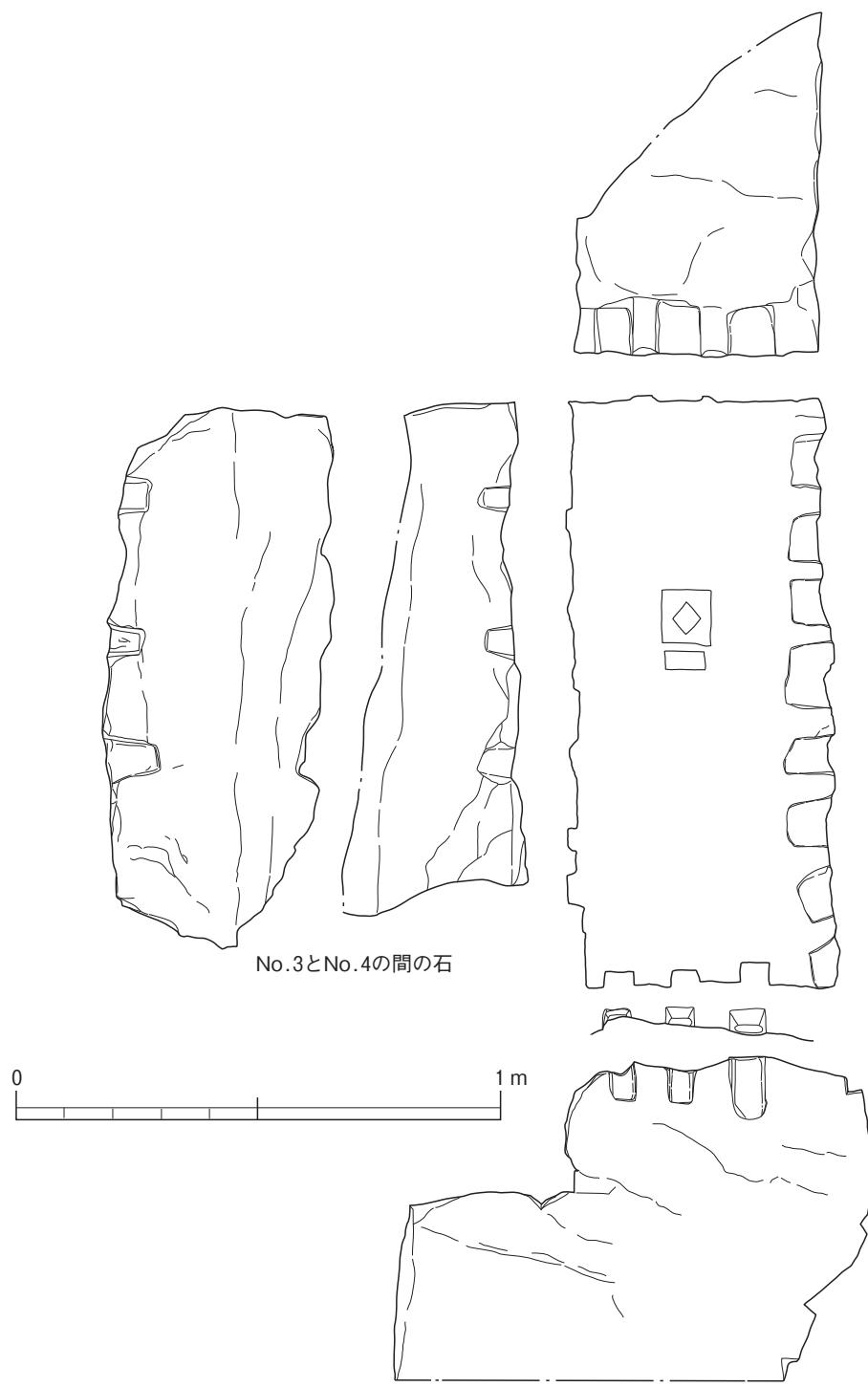


図11 甲山刻印群E地区北群No. 4石材

cm、底間幅7~8.5cmである。北側面(Y4-6)は50cmの間に3個の矢穴が確認でき、口幅8~9.5cm、底幅7.5~9.5cm、深度10~11cm、口間幅5~6cm、底間幅6cmである。矢穴型式はAタイプである。また、No. 4と対になる割石が西隣にあり、西側面(Y4-1)は111cmの間に3個の矢穴が確認でき、口幅6~8cm、底幅5~6cm、深度5~10.5cm、口間幅17~24cm、底間幅17.5~26cmで

ある。

No.15の南面側(Y15-1)は25cmの間に2個の矢穴が確認できる(図8)。口幅7~10cm、底幅7~10cm、深度8~10cm、口間幅3cm、底間幅4cmである。矢穴型式はAタイプである。

No.16はT.P.175.7mに位置する。長さ134cm、幅60cmである。東側面(Y16-2)は58cmの間に4個の矢穴が

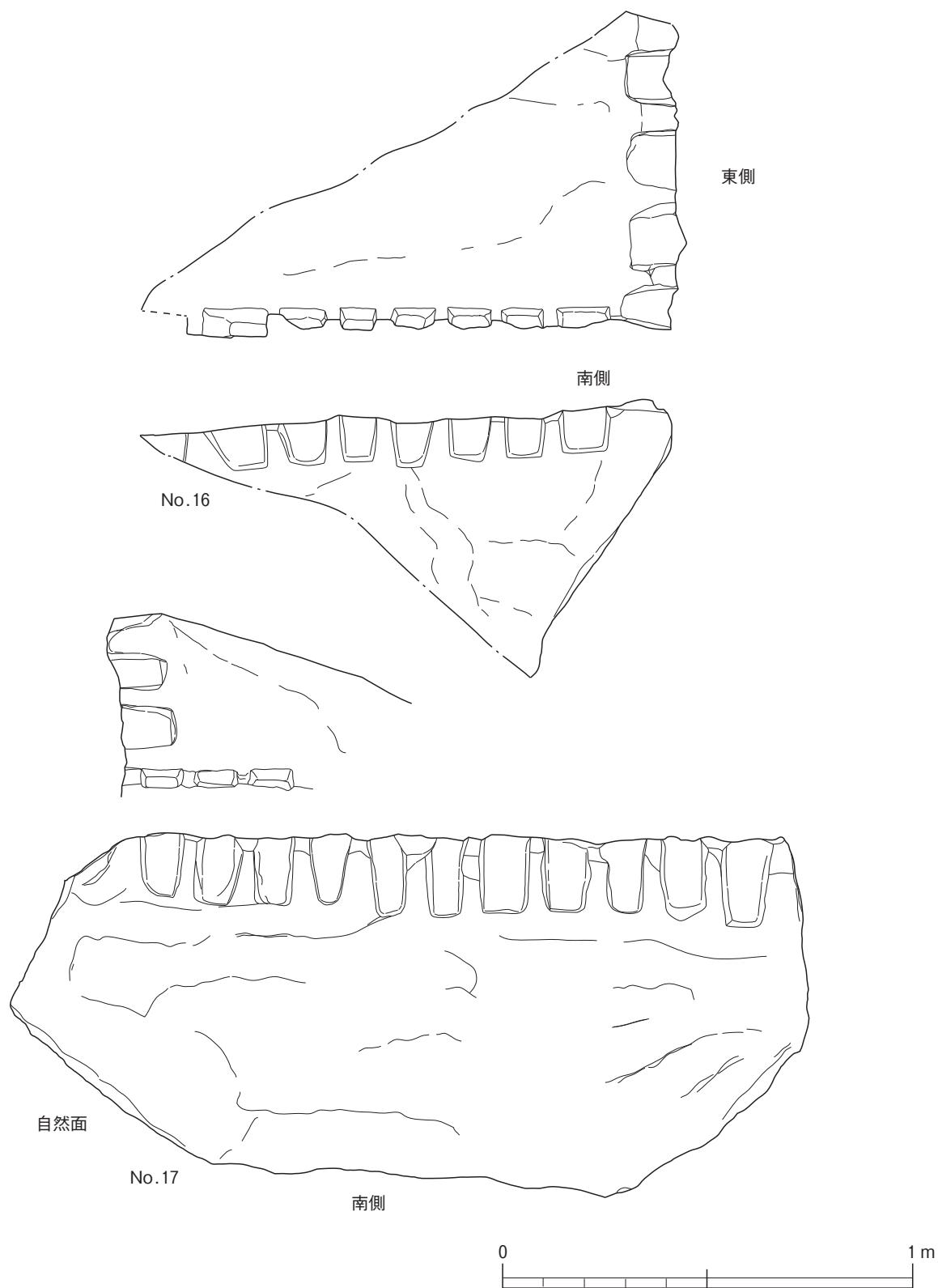


図12 甲山刻印石群E地区北群No.16・17石材

表1 甲山刻印石群E地区北群No.3・4・15~17矢穴法量一覧

Y3-1

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	9	7	11	3	6
	b	9	6	8	3	7
	c	10	9	8		

Y3-2

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	11	10	8.5	3	6
	b	10	10	9	4	6
	c	11	11	8	3	5
	d	9	7	7	3	9
	e	10	10	6	5	7
	f	5.5	4.5	4	4.5	6
	g	10.5	9	7	3	7
	h	9.5	8.5	8	4	6
	i	9	8.5	7	4	7
	j	10	7.5	8.5	5	9
	k	10.5	9	9.5	3	7
	l	10	10	10	4	7
	m	10	9.5	9	3	7
	n	10	7.5	9		

Y4-1

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
イ	a	8	5	10.5	17	17.5
	b	6	5	6	24	26
	c	7	6	5		

Y4-3

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	4	4	6	24	25
	b	6.5	4.5	5	18	20
	c	6	5	7		

Y4-4

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
工	a	5	5	7	6	7
	b	5	5	6	7	8.5
	c	7	7	12		

Y4-5

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a				5	4.5
	b	8.5	9	5	5	7
	c	9	8	5.5	3.5	4
	d	8.5	8.5	7	3.5	5
	e	13	13	9	5.5	7
	f	7	7	9.5	5	6
	g	9.5	8.5	8	4	8
	h	10.5	10	6	4.5	6
	i	9	8	7		

Y4-6

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	9.5	9.5	11	5	6
	b	9	8	11	6	6
	c	8	7.5	10		

Y-15

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	7	7	10	3	4
	b	10	10	8		

Y16-1

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
キ	a	15	10	10.5	3	6
	b	12	9	10	3	4.5
	c	8.5	7.5	10	3	6
	d	9	7	10	3	6
	e	9.5	8	10	3	6
	f	9.5	8	9	3	5
	g	11	11	9		

Y16-2

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
力	a	10	9.5	9	4	6
	b	11	9.5	8.5	2	5
	c	12	11	8	4	4.5
	d	8	7	9		

Y17-1

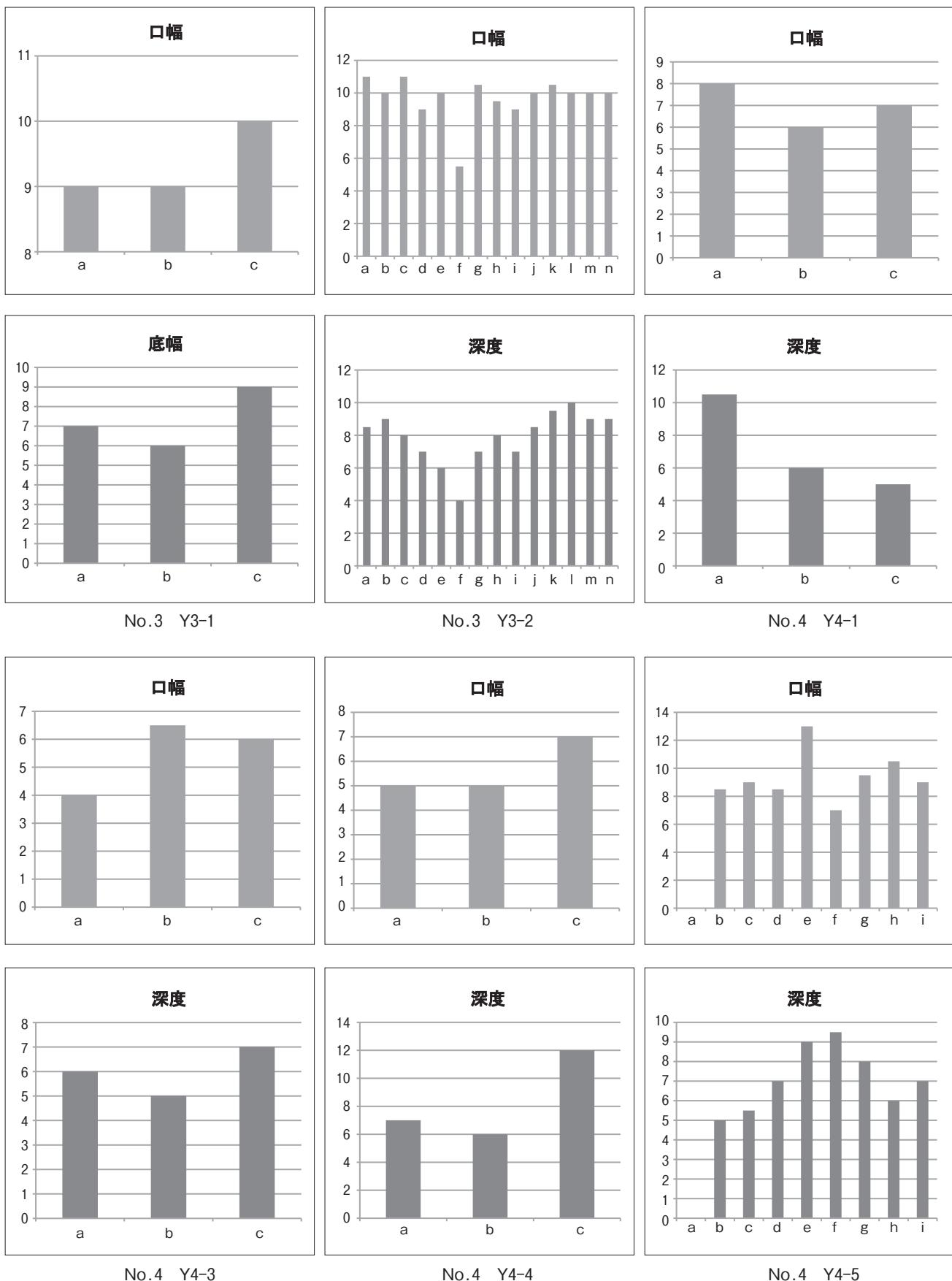
▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
コ	a	8.5	8.5	13	5	8.5
	b	10	8.5	13	4	5

Y17-2

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
ケ	a	10	6	15	5	7
	b	10	6	16	3	6.5
	c	9	9	15	3	6
	d	10	5.5	15	4.5	9
	e	8	6	18	4	6
	f	9	7	18.5	3	4.5
	g	12	12	18	3	6
	h	10	9	17	2.5	5
	i	11	8	17	3	6
	j	11	8.5	19	3	4
	k	12	9	21		



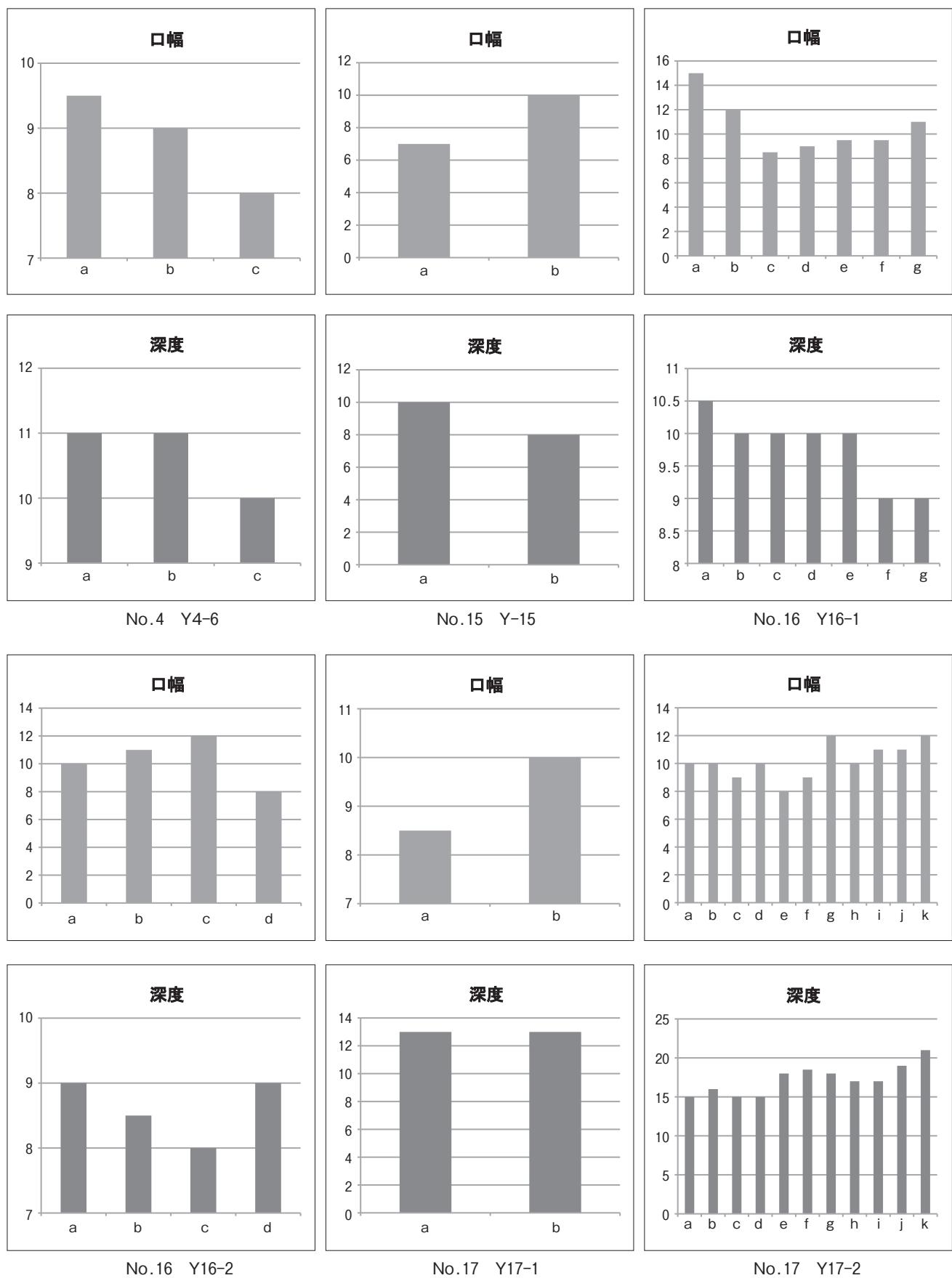


図14 甲山刻印群E地区北群No. 4・15~17矢穴法量グラフ



写真13 甲山刻印群E地区No. 3・4・16（北西より）

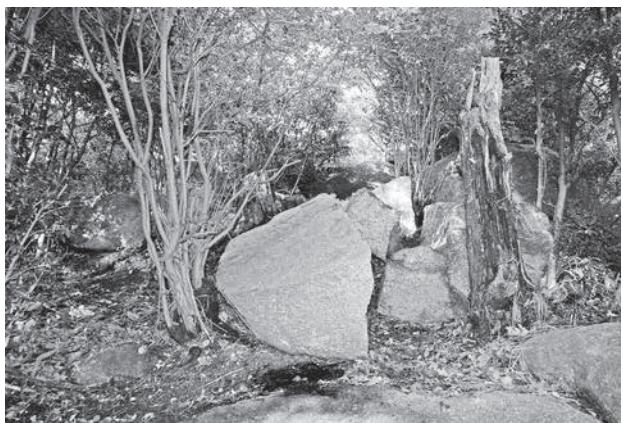


写真14 甲山刻印群E地区No. 3・4・16（南西より）



写真15 甲山刻印群No. 3 刻印面（北西より）



写真16 甲山刻印群E地区No. 4 刻印面（北西より）



写真17 甲山刻印群E地区No. 4-4・5（南より）



写真18 甲山刻印群E地区No.16（北より）



写真19 甲山刻印群E地区No.17-1（西より）



写真20 甲山刻印群E地区No.17-2（南西より）



写真21 甲山刻印群E地区No. 3刻印



写真22 甲山刻印群E地区No. 4刻印



写真23 甲山刻印群E地区No.15 (南西より)



写真24 甲山刻印群E地区踏査風景 (南西より)

確認できる（図12）。口幅8～12cm、底幅7～11cm、深度8～9cm、口間幅2～4cm、底間幅4.5～6cmである。南側面（Y16-1）は134cmの間に7個の矢穴が確認でき、口幅8.5～15cm、底幅7～11cm、深度9～10.5cm、口間幅3cm、底間幅4.5～6cmである。矢穴型式はAタイプである。

No.17はT.P.175.7mに位置する。長さ160cm、幅70cm、厚さ40cmである（図12）。西側面（Y17-1）は40.5cmの間に3個の矢穴が確認でき、口幅8.5～10cm、底幅8.5cm、深度13cm、口間幅4～5cmである。南側面は160cmの間に11個の矢穴が確認され、口幅8～12cm、底幅5.5～12cm、深度15～21cm、口間幅2.5～5cm、底間幅4～9cmである。矢穴型式はAタイプである。なお東と北側面は矢穴のない自然面である。

## 5. まとめ

No.3・4・15～17に残る矢穴の大半は矢穴型式がAタイプである。この刻印のある石材の矢穴Aタイプとは、徳川大坂城東六甲採石場に伴う矢穴に多く、割付線を用いて直列に矢穴を並べるタイプのことである。特徴としては、平面は長方形で断面は逆台形またはコ字形であり、長さと深さは7～13cmという点がみられる（図5）。

E地区でAタイプの矢穴が多く残されていることから、元和期（1615～1624年）に徳川大坂城の採石場であった。ところが、特にNo.4に残るY4-1の矢穴列は矢穴の間隔も粗く、Y4-4とともに小ぶりのものである。このことは後世に石造品の採石場として再利用されたことを示している。その石切りの順は、Y3-1・Y4-6→Y4-2・4→Y4-1・3と考えられる。

## 注

- (1) 石垣や堀などの修理や土木工事を担当する役職名。
- (2) 割石のうち、ある目的の形状に加工して整えられた石材。
- (3) 風化をとどめた石の表面。自然の状態をとどめた部分。
- (4) 矢穴列で割った痕跡を残す石材。

## 参考文献

中村博司 2006『徳川時代の大坂城再築工事をめぐって：甲山石切丁場と城内巨石の紹介を中心に』第14回関西学院大学図書館学術資料講演会要旨

兵庫県教育委員会事務局文化財室 2008『徳川大坂城東六甲採石場－国庫補助事業による詳細分布調査報告書－』兵庫県教育委員会事務局文化財室

岸 薫美 2015「東六甲採石場甲山刻印群（E・G地区）の踏査」『京都橘大学歴史遺産調査報告2014』京都橘大学文学部

## 第4章

# 山科大塚・小山石切丁場のクレーター状平場の測量調査

## 1. 調査の経緯と経過

山科大塚・小山石切丁場は京都市山科区に所在する石切丁場である。

この石切丁場の確認は古く、1979年の伏見城研究会と築城史研究会による調査が初めとされる。その後、武内良一氏をはじめとする地元調査グループが調査を引き継ぎ、刻印石の所在を明らかにし、石切丁場内の石材分布とそれに対応する石材番号も付けられている。そして、現在に至っても精力的な分布調査を続けられている。その結果、2015年から埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に載った。

今回の調査は、これら調査結果を受け、2015年8月3日から8月9日までの1週間を中心に、大塚東群の丘陵斜面において、矢穴石が残るクレーター状平場の平板測量による調査を実施した(図21)。標高278.000~292.750m



図15 山科大塚・小山石切丁場位置図(図中の分布と数字は武内良一・久保孝  
2014「大塚山大名印石一覧」からの引用)

の等高線を入れた地形測量図を作成した(図17)。測量図は25cmセンター、縮尺1/100である。また、合わせて矢穴石の実測も行った(図18)。本稿では、これら測量調査及び実測による成果を報告する。

## 2. 調査地の位置と環境

京都市山科区は京都市の東部に位置し、山科盆地の北部と、周辺の山地をその範囲としている。山科大塚・小山石切丁場は、京都橋大学の裏山に広がる行者ヶ森周辺の大塚と、山科音羽川を挟んで北側に位置する小山にひろがる。この付近の音羽山系は、丹波帯で構成されるが、大塚や小山付近には、斑状花崗岩脈が一部露頭している地域があり、そのような所をねらって石切丁場としたと考えられる(奥田2016)。

刻印石・矢穴石の分布については、行者ヶ森山頂付近から西斜面、東斜面の大塚と小山の山中に多く分布している。これらは、山科音羽川沿い、その上流域に集まることが地元調査グループによりつきとめられている。

これらの地域に分布する刻印石は、一字一つ星の毛利家の家紋略式刻印とされるものと、若狭京極家または越前松平家の可能性があげられている四角の中に○の平四つ目結や全体が菱形状になる隅立四つ目結刻印というものがあり、大きくこれら2種類が確認されている。それぞれの刻印石は岩肌や切り出す予定の石材に見られ、特に四つ目結刻印のものは石切丁場の境界を示すように各谷筋ごとに分布している状況である(図21)。

現在、150個以上が確認される矢穴石の分布については、岩脈にそって分布が確認されており、刻印石の周囲及び下方にむかって多く分布する傾向がある。今このところこの範囲から大きくはずれたところはない。また、2014年度の踏査により、刻印石や矢穴石のまとまりで大きく大塚西群、大塚東群、小山にわけることができる(図15)。

## 3. 調査成果

今回の調査は、大塚東群の北端に位置する矢穴石及びその周辺の地形測量である。

## (1) 地形測量

地形測量は、平板を用いて平板測量を行った。測量範囲は、矢穴石のあるクレーター状平場を中心とした南北約35m、東西約55mである。測量の基準杭は、世界測地系に基づき3-1、3-2、1～4の計6本を設置した。以下にそれぞれの杭の座標を記しておく。

3-1 : X = -113351.774, Y = -14706.765, Z = 280.941

3-2 : X = -113371.302, Y = -14734.920, Z = 289.897

1 : X = -113379.697, Y = -14716.304, Z = 292.396

2 : X = -113348.744, Y = -14717.974, Z = 280.827

3 : X = -113367.794, Y = -14736.972, Z = 288.512

4 : X = -113365.315, Y = -14691.039, Z = 285.943

測量成果と所見を整理しておくと、まず、矢穴石のあるクレーター状平場はT.P.280.500～281.000mに位置し、東西約7m、南北約9mの楕円形の窪みとその東側に広がる東西約10m、南北約7mの平坦面である。その北側は、ハイキングコースとなっている小道に接続している。その小道より北側は急傾斜となっており、地形は北東方向に緩やかに傾斜している。また、平場の南側は、T.P.286.000m付近まで平場に沿って湾曲した地形を呈しており、その斜面には転石と思われる数個の石材が顔をのぞかせる。

さらに、T.P.288.500～289.500mには、斜面をカットした様な窪みのある場所がみられるが、詳細は不明である。

## (2) 矢穴石

調査対象地においては、矢穴石を1石と数個の自然石材が確認できる。その中でも、クレーター状の平場に位置する矢穴石は、長辺約190cm、短辺が約105cm、高さ約40cm以上の台形に近い五角形を呈した大形石材である。直線的な3つの面には矢穴列が見られ、それぞれ異なった形状をしている。

矢穴列Aは、石材の最も短辺に残る3個の連続する矢穴である。矢穴の大きさは、口幅14.4～17.0cm・底幅13.2～14.4cm、深度14.4cmで、非常に大型の長方形に近い形をしている。

矢穴列Bは、石材の上面にみられる4個の矢穴である。矢穴の大きさは、口幅8.4～10.6cm・底幅5.4～9.2cm、深度7.4～9.9cmで、逆台形または隅丸の逆台形状をしている。

矢穴列Cは、側面から上方にかけて3個以上の矢穴が確認できる。矢穴の寸法は、口幅9.4～11.0cm、底幅3.4

～8.2cm、深度3.0～6.0cmで、逆台形または隅丸の逆台形状をしている。

また、石材の東側面は、風化による丸みがかった形状である。一方、西側面は、人為的かどうか不明であるが、大きく南北方向に割れている。

## (3) 石切工程の復元

これらの矢穴列には切り合い関係があり、その状況から石材の割り方を復元してみる。

まず、矢穴列Bと矢穴列Cには、切り合い関係がみられ、矢穴列Bが先行していることが確認できる。次に矢穴列Cは、西面の割れの後に掘られている。また、その西面の割れは元の大形石材から矢穴列Aによって切り出した後にできたものである。

つまり、矢穴列Cは矢穴列Bより新しく、矢穴列Cは矢穴列Aよりも新しい。

このように、矢穴の形状や分割方法から考えて、この矢穴石は、まず矢穴列A、西面の割れ、矢穴列B、矢穴列Cの順で分割されたものと推測される（図19）。

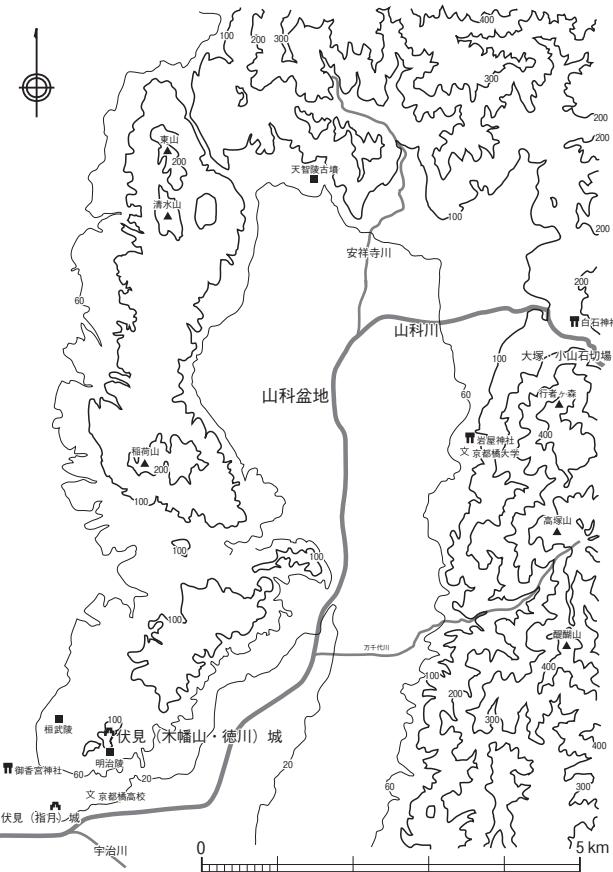


図16 山科大塚・小山石切丁場と伏見城位置関係図

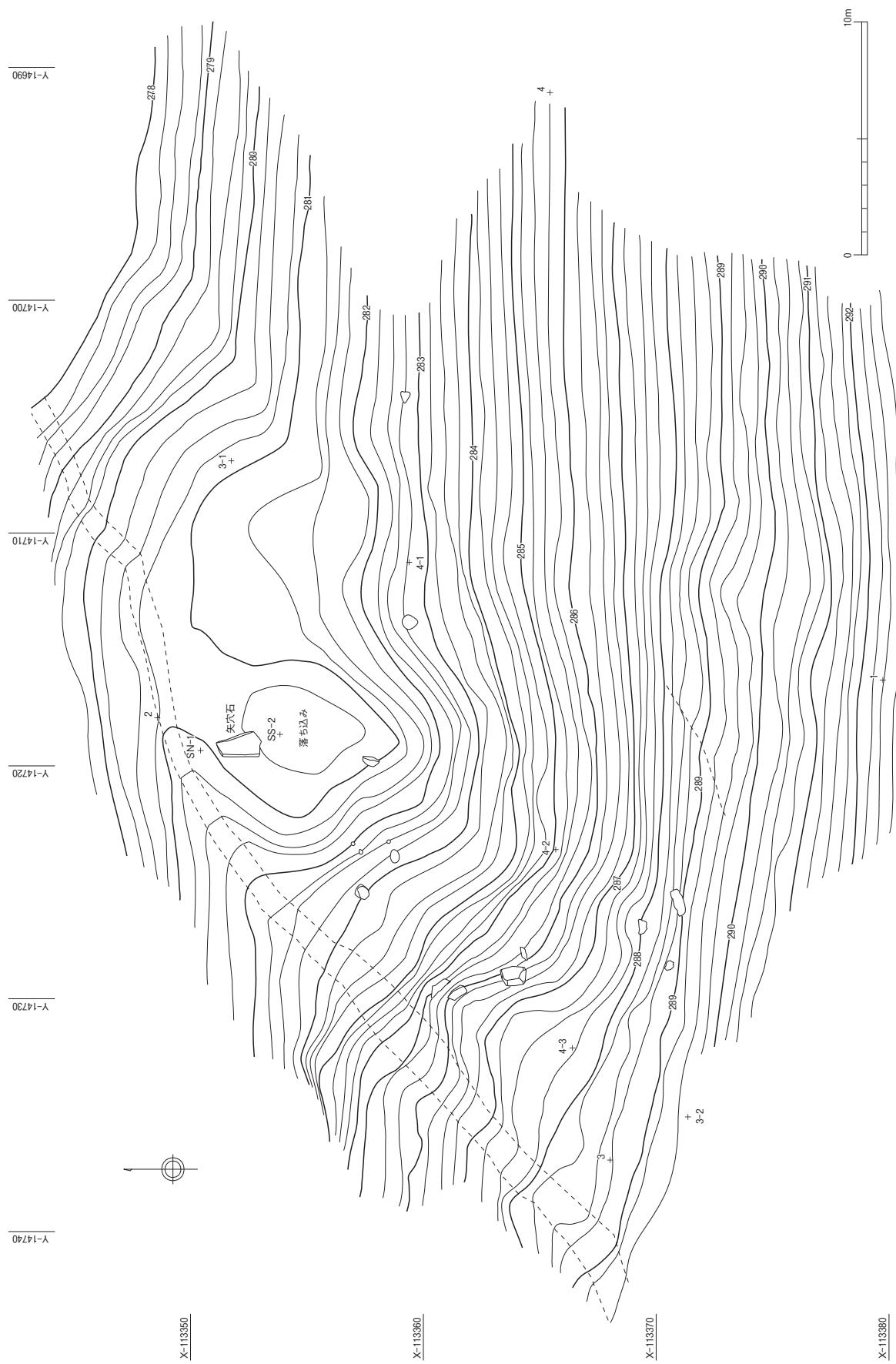


図17 山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場測量図

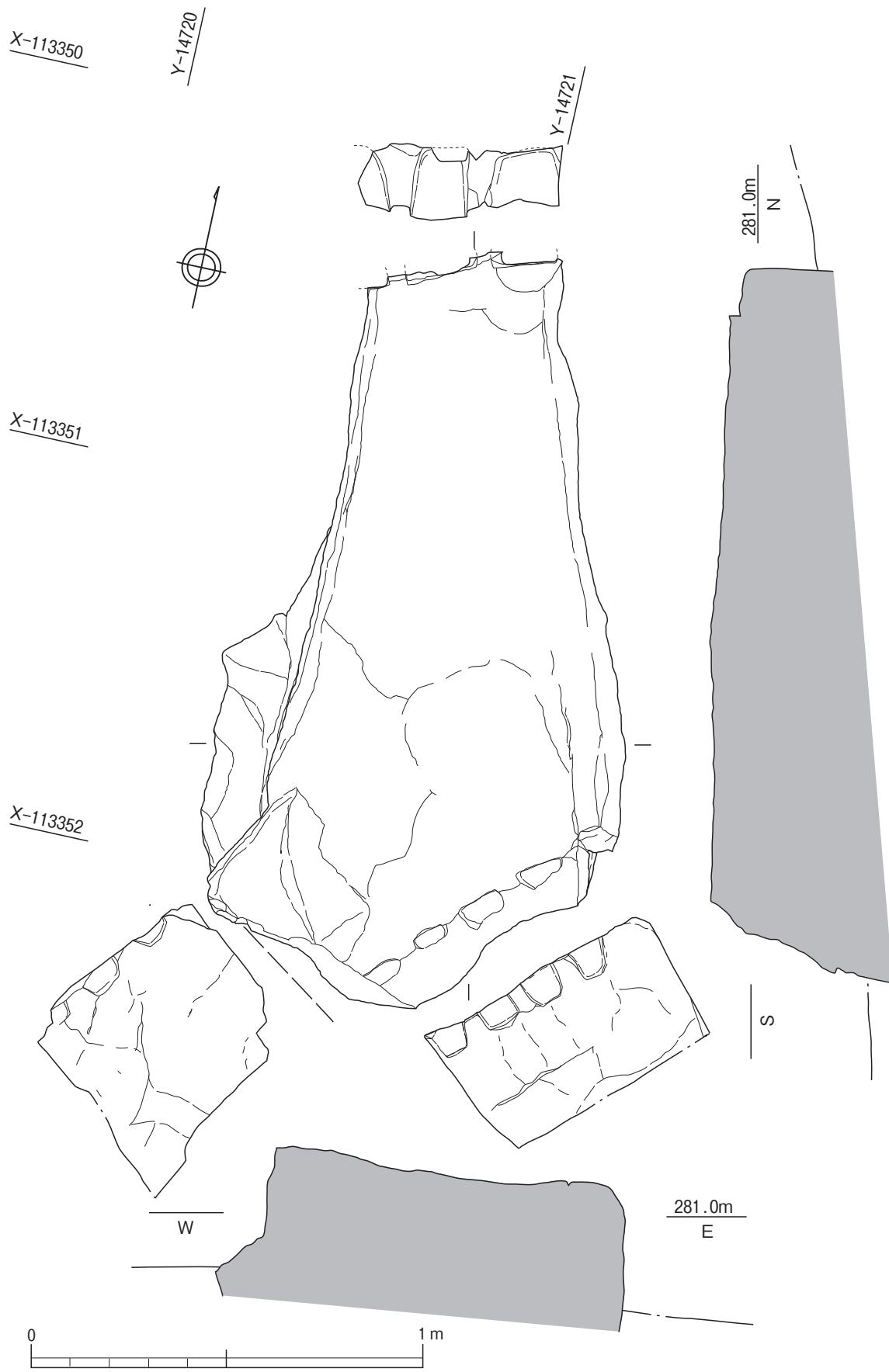


図18 山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場矢穴石

## 4. まとめ

本調査地は、刻印石や矢穴石が集中する大塚東群の中心から急斜面を北に下った場所になる。矢穴石は実測を行った石材一石しか見当たらず、周辺の斜面を踏査したが0.5~1m程度の自然石が数石あるだけであった。また、矢穴石周辺は丘陵を切り崩して平場を作っており、他にも丘陵を窪めたような地形が見られた。これらの痕跡は採石が行われていた当時の地形なのか、後世の改変によるものなのか、明確に判別できなかった。しかし、矢穴石周辺を窪めていることは大形石材を確保するために行った可能性も考えられる。

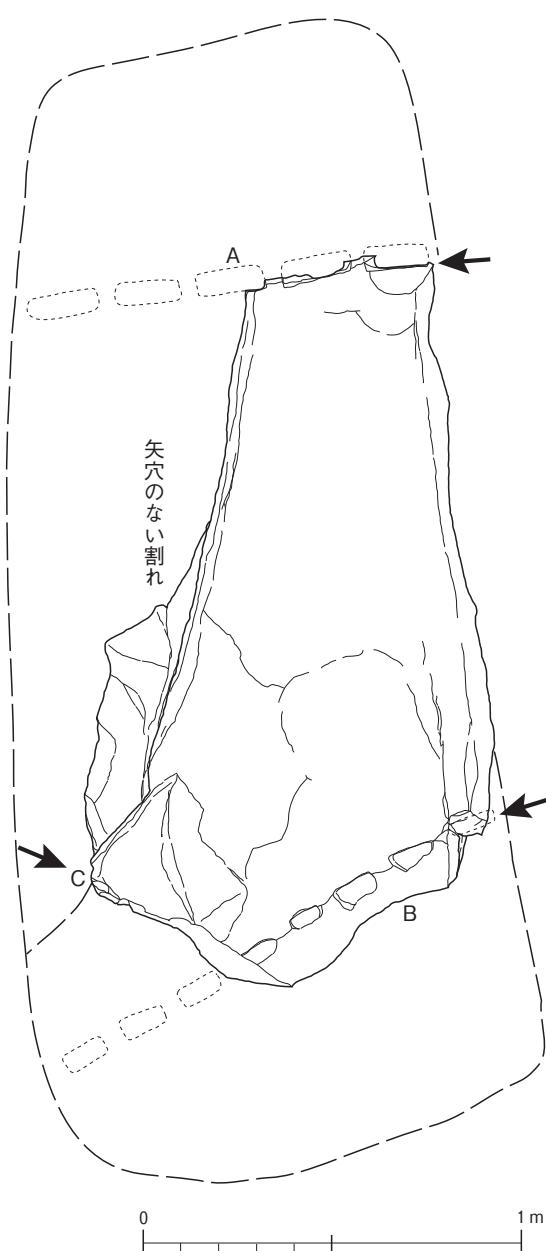


図19 山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場矢穴石切模式

次に矢穴石を見てみると、形状の異なった矢穴が一つの石材に掘られており、2回以上に分けて分割したことが考えられる。また、矢穴列Aと矢穴列Bは、石材の上面に掘られており、石材が現在の向きで存在した状態であった頃に掘られた可能性が高い。さらに、矢穴列Aは他に比して大きい。

これらのことから、矢穴石とその周辺の地形の関係を検討してみると、

①矢穴石を丘陵の中腹から運び出した場合、大塚東群の中心で大形石材を確保し、地形が比較的緩やかな本調査地付近に平場を作りて石材を仮置きあるいは二次加工を行った。

②矢穴石が丘陵の中腹から転落してきた場合、大塚東群の中心で確保した大形石材が転落して放置されていた石材を後世に平場を作り再度石割りを行った。

③丘陵を切り崩して大形石材を確保した場合、もともと調査地に大形石材があり、周辺を切り崩して平場をつくり石割りを行った。

以上のような動作関係が想定される。

また、矢穴石周辺においては、ピンポールを用いて地中内の様子を探ってみたが、石材らしき反応を全く確認できなかった。つまり、この平場では石割りや二次加工などが行われていなかたと推測される。

さらに、矢穴石は矢穴列Aの面に約50cm四方の面、矢穴列Bの面に幅約70cmの間をつくり、長辺は約190cmという近世城郭の石垣石材に近い規格となっている。

これらのことから、この矢穴石及び周辺の地形は、地形が比較的緩やかな本調査地付近に平場を作り、丘陵の中腹で近世城郭用の規格石材として粗割りされたものが仮置きされたまま放置された可能性が高いのではないかと考えられる。

しかし、遺物などと共に伴している状況などを発掘調査によって解明したわけではなく、あくまでも推測の域をでないため、今後も継続的な調査が必要である。

ただし、これまで存在すらはっきりと分かっていなかった山科の石切丁場の調査をすることができ、一部分ではあるが基礎資料を作成することが出来たことは大きな成果といえる。

## 参考文献

- 一瀬和夫 2015 「山科（大塚・小山）の石切場の踏査」  
『京都橘大学歴史遺産調査報告2014』京都橘大学文学部  
奥田 尚 2016 予定「行者ヶ森付近の石切場跡の石材と石種」『古代学研究』209号 古代学研究会  
武内良一 2015a 「山科の石」について－伏見城関連 山科（大塚・小山）の石切場－（上）』『古代学研究』206号 古代学研究会  
武内良一 2015b 「山科の石」について－伏見城関連 山科（大塚・小山）の石切場－（下）』『古代学研究』207号 古代学研究会

表2 山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場矢穴石矢穴法量一覧

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	17	14.4	14.4	6.2	7.8
	b	14.4	13.2	18	5.4	12

矢穴列A

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	8.4	6.4	7.8	4	6.4
	b	9.2	9.2	7.4	3.8	4
	c	9.6	5.4	8.4	4.6	7.4
	d	10.6	6.2	9.4	5.4	12

矢穴列B

▽計測値

面	位置	口幅	底幅	深度	口間幅	底間幅
	a	11	8.2	6	7	9.6
	b	9.4	3.4	3		12

矢穴列C

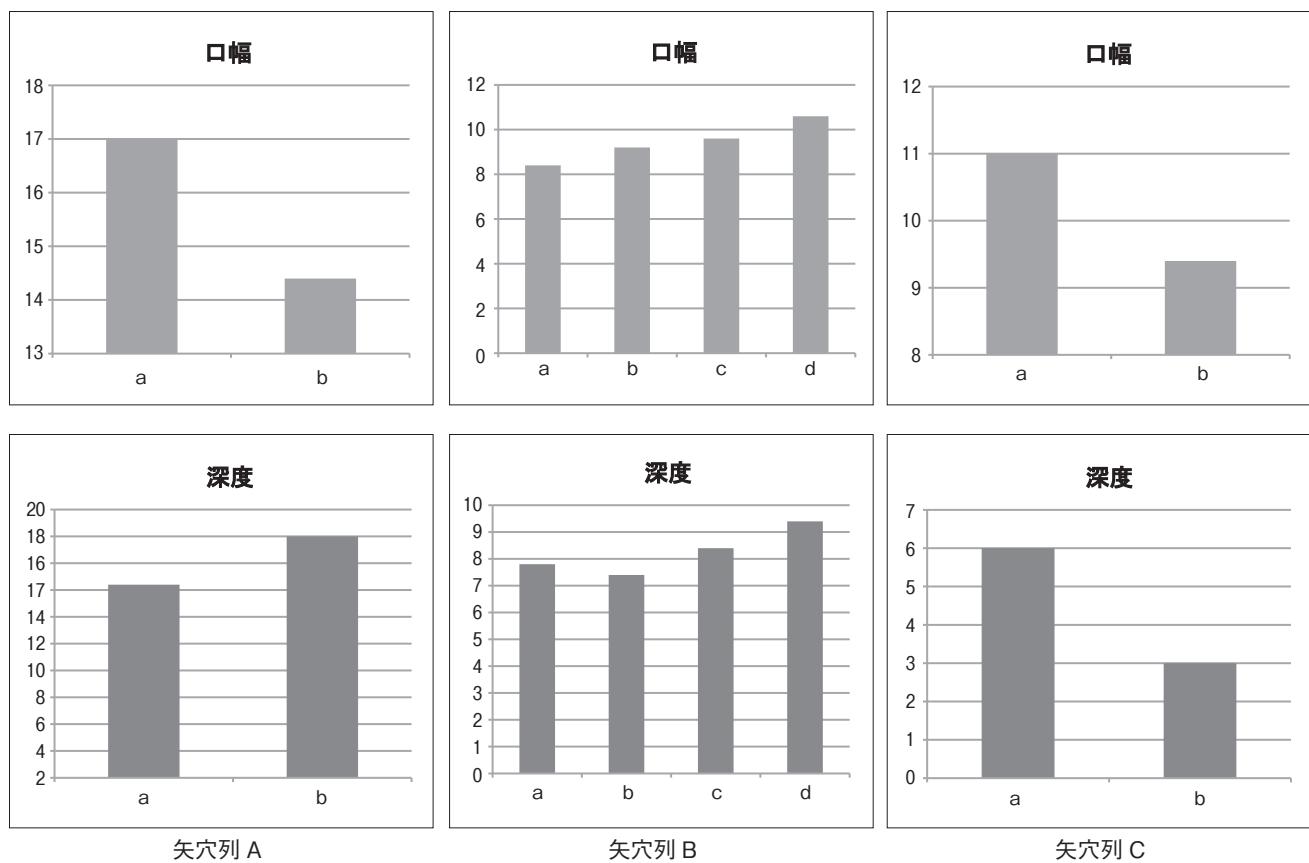


図20 山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場矢穴石矢穴法量グラフ



写真25 山科・大塚東群クレーター状平場－1（南東より）



写真26 山科・大塚東群クレーター状平場－2（西より）



写真27 山科・大塚東群クレーター状平場－3（東より）



写真28 山科・大塚東群クレーター状平場矢穴石(北東より)



写真29 山科・大塚東群クレーター状平場矢穴石(南東より)



写真30 山科・大塚東群クレーター状平場石材 矢穴列A  
(北より)



写真31 山科・大塚東群クレーター状平場石材 矢穴列B  
(南東より)



写真32 山科・大塚東群クレーター状平場石材 矢穴列C  
(南西より)

## 第5章

# 山科大塚・小山石切丁場の刻印石の踏査

## 1. 概 要

京都市山科区大塚・小山の山中に所在する石切丁場には、京都橘大学の裏山にあたる行者ヶ森の山の頂上付近から東及び北斜面の大塚と小山の山中に刻印と矢穴のある石材が分布する。その状況については、遺跡報告として、武内良一氏が「山科の石」について一伏見城関連山科（大塚・小山）の石切場一にも詳しくまとめているところである<sup>(1)</sup>。

この石切丁場と関連するといわれているものが伏見城の石垣石材である。1623（元和9）年に伏見城廃城後の石垣石は、同年頃から、淀城築城や大坂城に再利用されたものと考えられている。その石材として「山科石」があげられる。その供給地がこの大塚・小山の石切丁場である。この地域では、2016年2月現在において、15石、19刻印が確認されている。なお、地元の平井信夫・岩村義憲氏のご好意も受け、入山させていただいている。記して感謝するところである。

ここでは刻印石の刻印についての写真を報告するものである。

## 2. 刻印の個々の様相

現在15石が確認される刻印石は、石切丁場での採石グループを示すといわれている。本学の裏山である石切丁場には、大きくわけて2種類の刻印が存在している。

一つ目は、一字星の毛利家、家紋略式刻印とされているものである。「二」が付属するものもある。これは、毛利家の編成家臣団四組を指すと森岡秀人氏は指摘している。二つ目は、四つ並んだ四角の中心に○が彫り込まれている平四つ目結刻印と、◇が彫り込まれている角立ち四つ目結刻印である。これらは、刻印の初現期のものとされ、また若狭京極家所用の可能性が考えられているところである。

石材の種類は、主に玄武岩質凝灰岩と石英斑岩及び、花崗斑岩である。

この地域は行者ヶ森北方の東斜面に位置しており、石材としては主に花崗斑岩が分布している。

奥田尚氏によれば、御坊ノ内町付近から聴呂の滝にか

けては、剪断された頁岩中にチャートや玄武岩質凝灰岩、砂岩のレンズ状をなす岩体が含まれていることである。その中、花崗斑岩は聴呂の滝を越えた部分から音羽の滝の南方まで分布している。そして、この花崗斑岩は行者ヶ森の北方にかけて分布し、尾根の西側では斑晶が顯著な石英斑岩となって分布している。御坊ノ内町にある白石神社付近から北方にかけては、石英斑岩が岩脈として分布している<sup>(2)</sup>。

表3と図21に示すように南側にある大塚は大きく東西、5つの地区に分かれ。そして、細かくは西側のおせき渓、大塚大岩側にA・D地区、東側の大塚葭ヶ谷側にB・E地区となる。北側の小山は1石が確認されるのみである。まず、大塚のA地区では、1977（昭和52）年に「角立ち四つ目結」が持山者から報告されたのを契機にして、現在では4石が確認されている。A・D地区の4刻印は一辺が13cmで統一され、いずれも4個の菱形の集まりである。刻印の中でも菱形の中に点ではなく丸が刻まれているものと、石材が硬質であるためか彫り込まれた形跡がないものもある。B・C・E地区は共通してA地区に比べ多数の石が存在している。矢穴の種類として、先Aタイプは少ないが、Aタイプは共々あり、B地区的特徴として、Bタイプの間口幅より深さが長い矢穴跡が見られ、採石時期が何時期かにわたると考えられる（図5）。

次に、地区ごとで刻印について細かく見ていくことにする。

### （1）A・D地区

A地区のNo. 1は全長2.4mの玄武岩質凝灰岩で、向って石の左上方に刻印が位置する（写真33）。No. 2は全長2.48mの石英斑岩で、石の中央部に刻印石が位置する（写真35）。D地区のNo. 8は全長1.6mの花崗斑岩で石の右下に刻印が位置する（写真49）。No. 9は、全長4.1mの石英斑岩で、石の下割れ面に刻印が位置する（写真51）。このNo. 9は行者ヶ森北方の西斜面に分布している。

### （2）B 地区

B地区では、「一に○」と「一に○ 二」の刻印がある。全長4.5mあるNo. 3は、石を見上げて上方に位置し、一が30cm、○の径が28cmの「一に○」と、石上部に位置し、一が27cm・径が30cm、二までの幅3cmの「一に○ 二」がある。これらは併刻印である（写真37・39）。全長3.5mあるNo. 4は、石の上部に位置する、一が23cm・

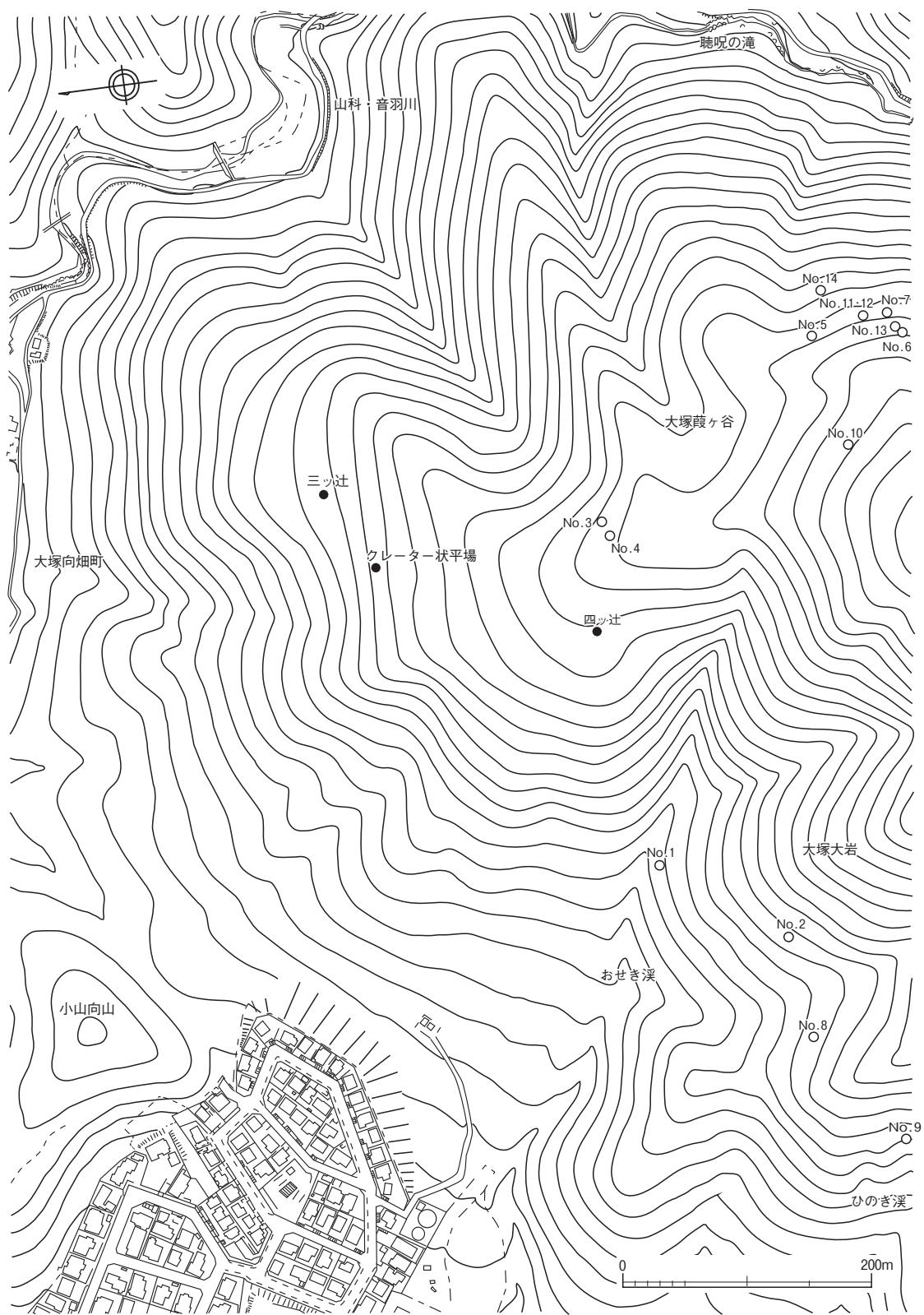


図21 山科大塚・小山石切丁場大塚地区刻印石分布図

径が26cm、二までの幅4cmの「一に○ 二」である（写真41）。

### （3）C地区

C地区では、「一に○」の刻印がある。全長2.4mあるNo.5は石の上部に刻印が位置し、一が30cm・径が30cmである（写真43）。全長2.2mあるNo.6は石を見上げて上方に刻印が位置し、一が20cm・径が23cmである（写真45）。全長2.6mあるNo.7は石の中央右に刻印が位置し、一が30cm・径が40cmの大きさのものがある（写真47）。

### （4）E地区

E地区では、併刻印のある3石と、それぞれ刻印のある2石を合わせて、5石が存在している。いずれも石材は花崗斑岩である。No.10～12が併刻印のある石である。全長2.1mあるNo.10は、石の右上方に位置する一が30cm・径が32cmの「一に○」と、石の左下方に位置する一辺20cmの「平四つ目結」の併刻である（写真53）。全長2.38mあるNo.11は、石の上方に位置する一が18cm・径が16cmの「一に○」と、石の中央部に位置する一辺15cmの「平四つ目結」の併刻である（写真56）。全長2.1mあるNo.12は、石の左上方に位置する一が20cm・径が16cmの「一に○」と、石の右上方に位置する一辺14cmの「平四つ目結」の併刻である（写真59）。ここでの「平四つ目結」の刻印の一辺は三様で、14・15・20cmと統制されていない。この他には、No.13とNo.14がある。全長2.6mあるNo.13は、石の左上方に刻印石が位置し、一

が25cm・径が18cm、二までの幅6cmの「一に○ 二」である（写真62）。全長2.0mあるNo.14は石の中央部に位置し、一が40cm・径が縦43cm・横38cmの楕円形をなす。「一に○」となっている（写真64）。このE地区のNo.14の「一に○」が現在確認できる刻印の中で最大の規模のものである。

### （5）小山地区

小山地区には、1955（昭和30）年頃まで石伐りが行われ、ドリル跡の残る石もある。石垣石用の矢穴跡の残る石はAタイプのものであった。また、全長7mあまりある小山の白石神社のご神体の大岩には、「一に○」の刻印が刻まれ、一が13cm・径が14cmである（写真67）。

## 3. おわりに

以上みてきたように、矢穴、刻印のある石は、大塚・小山の地域の中でも広範囲に及んで分布している。ここでは写真にも示すように、残りの良好なもの悪いもの様々であるが、今後も順次、確認していくものと思われる。

### 注

- (1) 武内良一 2015「『山科の石』について—伏見城関連山科（大塚・小山）の石切場—（上）・（下）」『古代学研究』206・207号。
- (2) 奥田 尚 2016予定「行者ヶ森付近の石切場跡の石材と石種」『古代学研究』209号。

表3 山科大塚・小山石切丁場刻印一覧表

確認番号	区分	地区	刻印名	刻印の法量（長さ／径）	石材	石の法量（横・縦・奥行）他	特記	備考
1	大塚	A	角立ち四つ目結	辺13cm	玄武岩質凝灰岩	2.4m×1.04m×0.9m	1977年確認	
2	大塚	A	角立ち四つ目結	辺13cm	石英斑岩	2.48m×3.05m×2.07m	1979年確認	
3	大塚	B	一に○	30cm／28cm	花崗斑岩	4.5m×3.0m	2012年確認	北面 東面
			一に○ 二	27cm／30cm				
4	大塚	B	一に○ 二	23cm／26cm	〃	3.0m×3.5m	2012年確認	
5	大塚	C	一に○	30cm／30cm	〃	2.4m×1.7m	2013年確認	
6	大塚	C	一に○	20cm／23cm	〃	2.2m×1.7m	2013年確認	
7	大塚	C	一に○	30cm／40cm	石英斑岩	2.6m×4.0m	2013年確認	
8	大塚	D	角立ち四つ目結	辺13cm	花崗斑岩	1.6m×1.2m×1.6m	2013年確認	
9	大塚	D	角立ち四つ目結	辺13cm	石英斑岩	4.1m×0.9m×1.2m	2013年確認	
10	大塚	E	一に○	30cm／32cm	花崗斑岩	2.1m	2013年確認 2014年確認	同石併刻例を 別々に確認
			平四つ目結	辺20cm				
11	大塚	E	一に○	18cm／16cm	〃	2.38m	2013年確認 2014年確認	同石併刻例を 別々に確認
			平四つ目結	辺15cm				
12	大塚	E	一に○	20cm／16cm	〃	2.1m	2014年確認 2014年確認	同石併刻例を 別々に確認
			平四つ目結	辺14cm				
13	大塚	E	一に○ 二	25cm／18cm	〃	2.6m	2014年確認	二は6cm幅
14	大塚	E	一に○	40cm／43cm、38cm	〃	縦2.0m	2014年確認	
15	小山	小山	一に○	13cm／14cm	石英斑岩	7.0m×4.2m×4.75m	2014年確認	白石神社

\*武内良一氏作成の表に基づき、加筆。



写真33 No. 1 刻印 左上



写真34 No. 1 刻印 A地区 角立ち四つ目結



写真35 No. 2 刻印 中央



写真36 No. 2 刻印 A地区 角立ち四つ目結



写真37 No. 3 刻印 割れ面上



写真38 No. 3 刻印 B地区 一に○



写真39 No. 3 刻印 右



写真40 No. 3 刻印 B地区 一に○ 二



写真41 No. 4 刻印 上



写真42 No. 4 刻印 B地区 一に○ 二



写真43 No. 5 刻印 中央上



写真44 No. 5 刻印 C地区 一に○

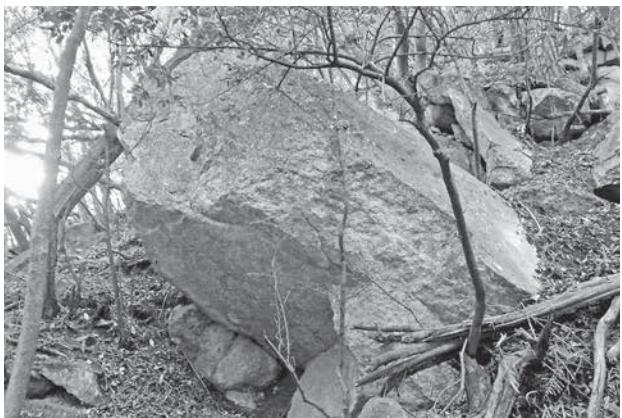


写真45 No. 6 刻印 下



写真46 No. 6 刻印 C地区 一に○



写真47 No. 7 刻印 中央右

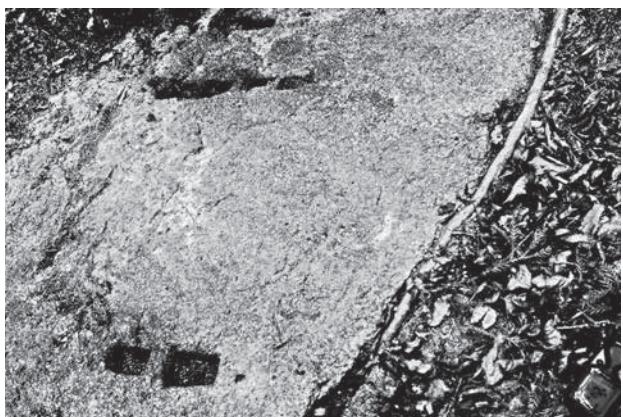


写真48 No. 7 刻印 C地区 一に○



写真49 No. 8 刻印 右下



写真50 No. 8 刻印 D地区 角立ち四つ目結



写真51 No. 9 刻印 中央右 下割れ面



写真52 No. 9 刻印 D地区 角立ち四つ目結



写真53 No.10刻印 中央・右上・左下



写真54 No.10刻印 E地区 一に○

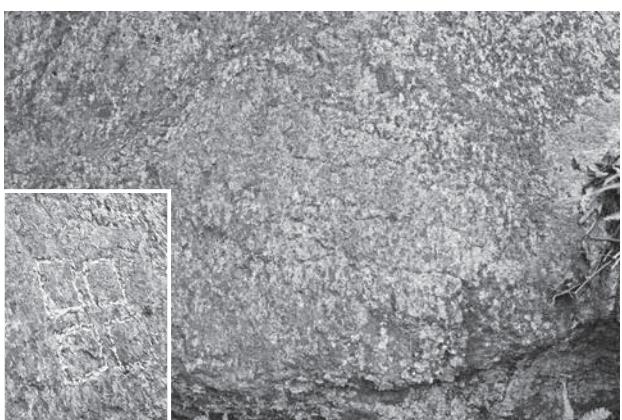


写真55 No.10刻印 E地区 平四つ目結



写真56 No.11刻印 上



写真57 No.11刻印 E地区 一に○



写真58 No.11刻印 E地区 平四つ目結



写真59 No.12刻印 左上・右上



写真60 No.12刻印 E地区 一に○



写真61 No.12刻印 E地区 平四つ目結



写真62 No.13刻印 左上



写真63 No.13刻印 E地区 一に○ 二



写真64 No.14刻印 左割れ面



写真65 No.14刻印 E地区 一に○

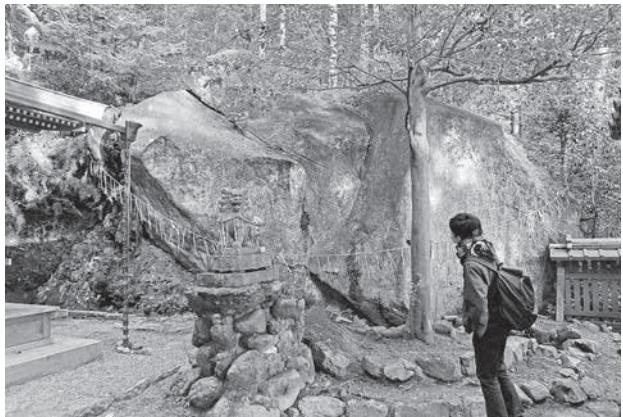


写真66 No.15 小山地区 白石神社大岩 上



写真67 No.15刻印 小山地区 一に○



写真68 No.15 小山地区 白石神社大岩 矢穴



写真69 No.3、No.4刻印石 全景



写真70 No.10刻印石 全景



写真71 No.13刻印石 全景



写真72 山科大塚・小山石切丁場 踏査風景

## 報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく れきしいさんちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 歴史遺産調査報告 2015							
副書名	華嚴寺（鈴虫寺）本堂、東六甲採石場甲山刻印石群E地区、山科大塚・小山石切丁場							
シリーズ名	京都橋大学 歴史遺産調査報告							
シリーズ番号	9							
編著者名	一瀬和夫 登谷伸宏 広瀬侑紀 嵐根絵美 岸 薫美 垣内彩那 山本温可							
編集機関	京都橋大学 文学部歴史遺産学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111							
発行年月日	2016年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくがわおおさかじょう 徳川大坂城 ひがしろっこうさいせきじょう 東六甲採石場	にしのみやしかぶとやまちょうはか 西宮市甲山町他	050090	050090	34° 46' 30"	135° 20' 18"	2015年8月17～ 20日 11月14日		学術調査
おおかみ 大塚・小山 いしきりちょうばあと 石切丁場跡	きょうと しやましなく おおかみ 京都市山科区大塚・ こやま 小山	26100	641	34° 58' 35"	135° 50' 16"	2015年 6月21日 7月12日 8月3～9日 12月19・26日		学術調査

**京都橋大学 歴史遺産調査報告 2015**  
**華嚴寺（鈴虫寺）本堂、東六甲採石場甲山刻印石群E地区、**  
**山科大塚・小山石切丁場**

発行 京都橋大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2016年3月31日

印刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL 075-351-6034



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY